ISSN 0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第92号

平成15年度京都府埋蔵文化財の調査 ---------- 長谷川　達 -- 1
共同研究　庄内式甕の出現 ---------- 高野　陽子 -- 9
平成15年度発掘調査略報 ---------- 23
17. 園部城跡第5次
18. 馬路遺跡第3次
19. 三日市遺跡第3次
20. 時塚遺跡第6次
21. 案察使遺跡第5次
22. 長岡京跡右京第781次・神足遺跡
23. 長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡
24. 長岡京跡右京第799次
25. 薪遺跡第5次
26. 西ノ口遺跡
府内遺跡紹介　98. 鳥居前古墳 ---------- 35
長岡京跡調査だより・89 ---------- 37
財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧 ---------- 39
センターの動向 ---------- 40

2004年6月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

平成15年度京都府埋蔵文化財の調査

長谷川　達

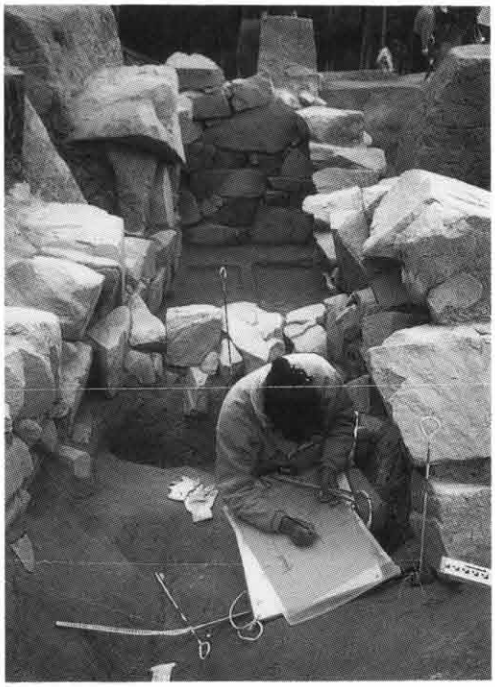
平成15年度に当調査研究センター(以下センター)が実施した試掘および発掘調査は、27件を数える。遺跡としては、対象地内で重複・連続するものがあり、付表のとおりとなっている。また、平成15年度のセンター事業としては、佐山遺跡、荒坂女谷横穴群、下植野南遺跡、市田斉当坊遺跡の４件の整理・報告書作成も大きな比重をしめた。京都府教育委員会の概報による平成15年１～12月の文化財保護法に基づく埋蔵文化財に関する届出などをみると、発掘調査の届出・報告は、233件で、近年、徐々に減少している。周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事などによる届出・通知は1,689件で、ここ数年は減少傾向が継続しているが、14年度よりは微増している。

ここでは、京都府を６地域に分け、北部から南部へと当センターの調査を中心に、一部府市町村教育委員会などによる各遺跡の調査成果も含めて紹介していく。

丹後地域

平成16年４月１日から丹後地域の中でも北部にあたる熊野・竹野・中郡の６町が合併し、京丹後市となった。このことから、各遺跡の所在地も名称が変更となっているが、ここでは昨年度の呼称を使用している。各市町が主体となった範囲確認調査が数か年計画で進められ、それぞれ今後の保存、整備、調査などへ向けての基礎資料が蓄積されている。

峰山町赤坂今井墳丘墓では、墳丘とその周辺を対象に規模などの確認調査が町教育委員会によって行われ、墳丘は、北西と南で２ｍ以上の盛土を行い、形状を整えていることが判明した。平成10年度の試掘調査以来、規模の大小はあるものの断続的に行われてきた調査の節目ともなる年で、今までの調査成果の集約が行われた。



第１図　今井古墳調査風景

その南の丘陵では、尾根先端付近に立地する今井古墳の調査を実施した。古墳は横穴式石室が設けられた直径約12ｍの円墳であった。石室は全長約7.5ｍの無袖式であるが、約4.5ｍの玄室は、羨道部より段差を設けて低く造られていた。このような構造をもつ横穴式石室は、竪穴系横口式石室に類似する石室として丹後地域でも10余例求められるが、多くは６世紀中頃のものであり、今井古墳の６世紀後半という時期は、やや特異な例となる。石室内の遺物には

平成15年度発掘調査一覧(当センター調査分のみ)

番号	遺跡名	種　別	所在地	担当者	調査期間	概　　要
1	今井(いまい)古墳	古墳	峰山町	岡崎研一	7～10月	横穴式石室1基。木棺直葬墓1基。須恵器特殊扁壺。
2	大垣(おおがき)遺跡・難波野条里(なんばのじょうり)制遺跡・一の宮(いちみや)遺跡	集落跡	宮津市	石崎善久 石尾政信	10～1月	室町時代の溝、柱列。木製品。銭貨。弥生～古墳時代の遺物包含層。
3	三角(みすみ)古墳群・三角経塚	古墳・経塚	舞鶴市	岡崎研一	4～6月	試掘。横穴式石室1基。木棺直葬墳2基。経塚3基。土師製筒形容器。水晶製数珠玉。
4	岡(おか)ノ遺跡第2次	集落跡	福知山市	戸原和人	7～2月	弥生・古墳時代の竪穴式住居跡。
5	観音寺(かんのんじ)遺跡	集落跡	福知山市	黒坪一樹 戸原和人 石尾政信	5～12月	弥生時代の溝・土坑・方形周溝墓・竪穴式住居跡。中世井戸。
6	園部(そのべ)城跡第5次	城跡	園部町	田代　弘	1～2月	江戸時代土坑・柱穴。
7	野条(のじょう)遺跡第8次	集落跡	八木町	田代　弘	5～9月	弥生時代の竪穴式住居跡。中世の掘立柱建物跡。
8	池上(いけがみ)遺跡第16次 野条(のじょう)遺跡第9次	集落跡	八木町	中川和哉	5～7月	弥生時代の土坑。古墳時代の竪穴式住居跡。瓦類。
9	池上(いけがみ)遺跡第18次	集落跡	八木町	中川和哉	9～10月	弥生時代の方形周溝墓。古墳時代の竪穴式住居跡。
10	高梨(たかなし)遺跡第3次	散布地	京北町	田代　弘	10～12月	サヌカイト製尖頭器。
11	里(さと)遺跡第6次	集落跡	亀岡市	小池　寛	5～8月	古墳時代後期の竪穴式住居跡。奈良時代の掘立柱建物跡。
12	河原尻(かわらじり)遺跡	集落跡	亀岡市	竹原一彦 細川康晴	7～1月	古墳時代後期の竪穴式住居跡。奈良時代の掘立柱建物跡。
13	三日市(みっかいち)遺跡第3次	窯跡・散布地	亀岡市	石崎善久	11～2月	奈良時代の瓦窯灰原(丹波国分寺関係瓦窯)。縄文土器。弥生土器。石庖丁。
14	三日市(みっかいち)遺跡第4次	散布地	亀岡市	森島康雄	2月	奈良時代～中世の遺物包含層。
15	馬路(うまじ)遺跡	集落跡	亀岡市	岡崎研一 村田和弘	10～2月	奈良時代の掘立柱建物跡。古墳時代の竪穴式住居跡。平安時代の溝。
16	時塚(ときづか)遺跡第6次 (時塚古墳)	集落跡	亀岡市	小池　寛	1～2月	弥生時代の竪穴式住居跡。古墳周濠。形象・円筒埴輪。
17	案擦使(あぜち)遺跡第5次	集落跡	亀岡市	中川和哉	1～2月	弥生時代の土坑。縄文土器。
18	長岡京(ながおかきょう)跡右京第781次・神足(こうたり)遺跡	都城跡・集落跡	長岡京市	松井忠春 石尾政信 高野陽子	7～1月	長岡京期の掘立柱建物跡・井戸・土坑。中世城館の堀。
19	長岡京(ながおかきょう)跡右京第787次・友岡(ともおか)遺跡	都城跡	長岡京市	竹井治雄	10～12月	平安時代の掘立柱建物跡。
20	長岡京(ながおかきょう)跡右京第795次・井ノ内(いうち)遺跡	都城跡・集落跡	長岡京市	増田孝彦	11～2月	古墳時代の溝。平安時代～中世の掘立柱建物跡。
21	長岡京(ながおかきょう)跡右京第799次	都城跡	長岡京市	岩松　保 竹井治雄	12～2月	サヌカイト剥片。平安時代の瓦。
22	芝山(しばやま)遺跡	官衙・集落跡	城陽市	柴　暁彦 竹井治雄	4～8月	奈良時代の掘立柱建物跡。古墳

23	うちさとはっちょう 内里八丁遺跡第20次	集落跡・ 古墓	八幡市	引原茂治 増田孝彦 高野陽子	4 ～ 2 月	奈良時代の井戸・土坑・掘立柱建物跡。絞胎陶枕。帯金具。 中世墓・島畠。
24	たきぎ 薪遺跡第 5 次	集落跡・ 古墳	京田辺市	高野陽子	1 ～ 2 月	埴輪。
25	にし　くち 西ノ口遺跡	散布地	山城町	柴　暁彦	1 ～ 2 月	弥生時代～中世の土器。
26	かたやま 片山遺跡第 2 次	集落跡	木津町	筒井崇史	7 ～ 2 月	縄文時代の土坑。奈良時代の掘立柱建物跡。
27	うちだやま 内田山古墳	古墳	木津町	筒井崇史	5 ～ 6 月	円筒埴輪片。

土器類、鉄鏃、鉄刀、滑石製・土製の小玉や金環があり、墳丘裾からは須恵器の中でも類例の少ない特殊扁壺が出土している。横穴式石室墳の盛土下から直葬された木棺痕跡が検出された。石室より一定期間古いものとは考えられるものの、遺物は無く時期は不明である。

大宮町三重の道路建設に際し、鎌倉時代の古墓が不時発見され、町教育委員会によって調査が行われた。五輪塔、板碑が散在し、越前壺、土師製筒形容器、土師器皿などが出土した。13～16世紀の古墓と経塚であることが判明し、水戸谷遺跡と名付けられた。

加悦町では、全長145mを測る国史跡蛭子山古墳の背後の丘陵に分布する明石大師山古墳群の内容確認調査が昨年に引き続き町教育委員会により実施された。尾根上に古墳約35基が連なり、調査の結果、弥生時代後期末～古墳時代前期にかけて築造されたことが判明した。また、一部は中世の山城の郭としても利用され、後世の改変を受けていた。野田川町地蔵山遺跡は、往時の景観を残す中世墓群として以前から知られ町指定史跡となっている。町教育委員会が5か年にわたり実施してきた範囲確認調査の最終年にあたる。遺跡縁辺や墓地への入り口付近の調査が行われ、火葬骨を入れたと考えられる小穴が列状に検出されたが、地上部の構造物の大半は失われていた。

特別名勝天橋立の北端山上にある成相寺は、現在も信仰と観光の対象として賑わっているが、標高約350m前後の峰々が古くから寺・城・墓として利用されてきた。全山が遺跡という状況を呈しているが、明確な分布図がないことから、宮津市教育委員会によって範囲・内容確認調査が続けられている。15年度は、旧境内と伝承される地域の一画で調査が行われ、平安時代に属するものを含む石積基壇や礎石などの遺構が検出された。大垣遺跡・一宮遺跡は、成相寺の山下にあり、丹後国一の宮とも呼ばれる籠神社周辺に広がる遺跡である。山裾から海までの緩斜面に広がる旧府中集落の中心部に重複して存在し、戦国時代末期、細川氏による宮津城築城まで丹後国の中心でもあった。ここに国道178号線のバイパスが計画され、14年度から当センターが調査を行っている。籠神社前では、現地表下約1.5mから室町時代の溝と、それに平行して設置された柱(杭)列が4条検出された。雪舟の「天橋立図」の中央に描かれた場所にあたり、海辺の道路関連施設、宅地との境界の施設などが類推できるが、調査面積も狭く、確定できない。さらに北東方の難波野条里制遺跡の一画からは、弥生～古墳時代の遺物がまとまって出土した。宮津城跡では、大手門に近い重臣屋敷内と考えられる地点が市教育委員会によって調査された。築城初期の地層から火を受けた石積みの遺構が検出され、関ヶ原の戦いの時、城主細川幽斎が田辺城(舞鶴市)で籠城する際、自ら城を焼いたという記録に合致する痕跡ではないかと考えられている。江戸期の

建物礎石や竹管を用いた水路なども出土している。

中丹地域

福知山市石原遺跡では、市教育委員会の調査で弥生時代後期の竪穴式住居跡３基(方形２、円形１)や縄文時代の土坑などが検出された。円形住居は、直径約10mを測るやや大型のものであり、昨年度も近傍で直径約11mのものが調査されており、この付近が弥生時代後期の石原遺跡の中心ではないかと推定されている。由良川の現流路に近い平坦な沖積地に広がる観音寺遺跡は、興遺跡とともに由良川中流域の拠点集落の一つとして知られ、近年も数次にわたる調査が行われている。今回の堤防建設に伴う調査も昨年から引き続き当センターが調査を実施しており、弥生時代中期の土坑・方形周溝墓、古墳時代の竪穴式住居跡を検出した。岡ノ遺跡は、平成12年度、福知山市教育委員会による宅地開発に伴う調査によって、弥生時代の方形周溝墓や古墳時代の竪穴式住居跡が検出され、福知山市市街地で最近、その内容が分かってきた遺跡である。今回は国道９号線の拡幅整備に伴い、丘陵を横断する道路に沿って約500mの間で数か所の調査を行った。その結果、弥生時代中期の竪穴式住居跡・溝・土坑、古墳時代の竪穴式住居跡や平安時代の包含層が確認された。以前の調査成果と合わせると、弥生中期の集落、墓域が周辺に広がること、標高40mの高所まで古墳時代の住居が存在することが判明した。平安時代の遺物には、京都府北部では出土例の少ない大型の緑釉椀が含まれている。

南丹地域

旧丹波国の南部、亀岡市、八木町では、現在、各種のほ場整備事業が盛んに行われ、それに伴う発掘調査が実施されている。特に桂川(大堰川)左岸は、国道、自動車道、鉄道が施設されている右岸と異なり、農地がよく残り、条里地割も含めた歴史的な景観を今にとどめている。そこには、保津車塚古墳・千歳車塚古墳・坊主塚古墳・天神塚古墳などの亀岡盆地で著名な古墳が連なり、後に国分寺・尼寺が建立されたのもこの地域であり、丹波国一宮とも通称される出雲神社も鎮座し、盆地北部の八木町域には、国府推定地の一つも存在している。そのような環境の中での調査であるだけに、数々の調査成果が新たに積み上げられている。

亀岡市里遺跡は、府営ほ場整備事業に伴い、平成10年から地点を変えつつ調査が続けられている。15年度は当センターで約1,200㎡の調査を実施し、古墳時代中期末～後期の竪穴式住居跡42基が密集・重複した状態で検出された。調査は、ほ場整備事業で遺構面の削られる部分を数か所に分けて調査しており、未調査部分を含めた住居跡の密度を単純に計算すると、15年度の調査地周辺だけで、1,000基以上の住居の存在が類推できる状況である。

亀岡市桂川(大堰川)左岸の近畿農政局が主体となる農地再編整備事業に伴い、これまでに保津車塚古墳・案察使遺跡・大淵遺跡などの調査が実施されてきた。今年度、当センターは、河原尻・三日市・馬路の各遺跡を中心に調査を行い、京都府・亀岡市の各教育委員会では、三日市・馬路・池尻・時塚・蔵垣内遺跡や坊主塚古墳などの試掘を中心に調査が進められた。

河原尻遺跡は、丹波国分寺・推定国分尼寺が立地する台地の南縁にあたり、古墳時代後期～飛鳥時代を中心とした焼失住居を含む60基以上の竪穴式住居跡や奈良時代の総柱建物跡など検出さ

れている。三日市遺跡は以前から瓦片が採取されていたが、試掘調査によって多量の瓦類が包含されていることが判明し、本調査に移行した。その結果、現在、住宅が建つ低台地の裾で検出された旧流路の斜面に瓦類が帯状に堆積していた。軒瓦類は丹波国分寺跡から出土しているものと同笵であることが判明し、遺物の出土状況やその中に窯壁片や変形・癒着した瓦類があることから、瓦窯の灰原であると判断された。後に隣接地で電気探査が行われ、台地斜面２か所に窯体の存在が推定されている。馬路遺跡は、現在の馬路集落の北側に広がる微高地に立地する。弥生時代の溝・竪穴式住居跡、奈良時代の掘立柱建物跡が検出され、平安時代の溝跡からは「田中」と墨書された亀岡市篠窯跡産の須恵器椀が出土している。

第２図　三日市遺跡瓦類検出状況

八木町市街地の東、亀岡盆地の北端の平坦な沖積地に広がる池上遺跡は、平成６～８年の分布調査によって認識され、その後、工場・道路建設、ほ場整備に伴い、大小の発掘調査が続けられた。その結果、弥生時代中期の集落をはじめとして、古墳時代および奈良時代～中世に至る大規模な遺跡であることが判明してきている。15年度の第17次調査は、この地域の開発に伴う一連の調査の最終段階ともいえるもので、調査面積は狭小であったが、弥生時代の方形周溝墓と古墳時代後期の竪穴式住居跡５基が検出された。また、北側に隣接して広がる野条遺跡の調査では、弥生時代後期の竪穴式住居跡２基と中世の掘立柱建物跡が検出された。

乙訓地域

長岡京跡の発掘調査は、昭和29(1954)年の中山修一氏による向日市鶏冠井町での最初の調査から50年を迎えた。当時、存在そのものに疑問をもたれていた都も、宮域さらに京域と調査が重ねられ、数々の成果をあげ、都の全貌に迫る努力が続けられている。関係各機関による調査は、３月末の時点で宮内430次、右京域808次、左京域489次を数え、合計1,727回に達している。

宮内第430次は、大極殿の前庭にあたる部分の調査となったが、ここでは宝幢遺構２か所(玄武・白虎坑)が検出され、以前の調査成果と合わせると５か所となり、未検出分を合わせると大極殿に対し、７基が東西一直線に並ぶことが判明した。旗柱を立てた遺構(土坑)は、長さ約４～５m、幅約１m、深さ１～1.3mの規模があり、大嘗祭、正月などの儀式の都度、何回も繰り返し使用された様子を窺うことができた。北方官衙域の宮内第423次調査では、柱間10尺で６間以上の南北棟建物が検出され、官衙中心建物の一つと考えられている。

向日市鶏冠井町で行われた左京第486次調査では、二条条間大路と東二坊坊間東小路の側溝が検出された。南北両側溝から二条条間大路の道路幅25mが確認され、南側溝内から、各種の土器

類８点(土師器椀・杯・皿、須恵器杯)、土錘14点、銅製鈴１点を置いた状態の折敷(長方形曲物)が出土した。長岡京廃都に関わり、側溝が埋められる直前に、鎮魂のために神饌を入れて置かれたのではないかと考えられている。

京都市西京区大原野石見町の長岡京跡右京二条四坊に相当する付近の調査(右京第772・775次)では、西四坊大路に面した四脚門が検出された。大路に面して門を設置することは、原則として禁止されており、それが可能な有力貴族の邸宅の存在が類推できる発見であった。この付近の一連の調査では、一条大路南側溝が約270mにわたって検出されたが、計画線より南へややずれる数値が得られている。また、西四坊坊間小路は検出されず、施設されていなかった可能性も残している。この付近は上里遺跡にも該当し、縄文時代晩期の甕棺墓、弥生時代の方形周溝墓、古墳時代後期の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡も確認された。

長岡京市のＪＲ長岡京駅周辺では、市街地の再整備事業が続いており、長岡京跡で調査件数が最も集中し、大小の調査が断続的に行われた。右京第770・771・774・776・781・782・785・796～798・800次調査などがある。この付近は長岡京跡右京域であるとともに、弥生時代中期の拠点的集落である神足遺跡や中・近世の勝龍寺城とも重複している。それら各々の時期の建物跡、井戸、条坊側溝、方形周溝墓、竪穴式住居跡など数々の調査成果が積み重ねられた。市街地化した阪急電鉄長岡天神駅前にあって、現在まで土塁の残る開田城館跡の第５・６次調査が行われた。応仁の乱の頃の文献に記載される城跡で、北・南・西辺土塁や堀が確認され、郭内からは、掘立柱建物跡・柵・井戸・土坑などが検出された。また、城の南西隅が張り出しており、出入り口の防御に関わる構造と考えられている。長岡京市神足の右京第781次調査では、14年度の第750次調査で検出され、土豪居館の堀の可能性も指摘された鎌倉時代の堀状の溝の延長部分が確認できた。溝は、現状で幅2.8～３m、深さ１～1.2mの規模をもち、南北方向に約130mと、さらに調査地南端で東西方向も検出されたことから、現在、調査地の西にある墓地と小学校敷地付近を囲むような区画を想定することができる。

長岡京市勝竜寺に所在し、国史跡にも指定されている全長約120mの恵解山古墳では、前方部で規模確認調査が行われた。その結果、前方部幅が残存墳丘からの復原よりも大きく、約70mあることが判明し、墳丘裾の一部には葺石も残存していたが、周濠は深さ30～40cmと極めて浅いものであった。長岡京市に接する大山崎町北部では、境野古墳群の試掘調査が行われた。周辺で唯一竹林として残る一画で、古墳４基が点在するとされていた場所であったが、原位置を保ち「く」の字に並ぶ埴輪列が検出された。その結果、後世に土地が大きく改変され、現状から窺う術もないが、埴輪・葺石をもつ全長約60mとも推定される古墳時代前期の前方後円墳が存在したことが判明した。調査地点周辺で４基とされていた古墳は、大型の１基に集約される可能性が高いが、住宅、工場用地として開発されている周辺からも、点々と古墳の痕跡が発見されており、本来、前方後円墳を盟主墳とする古墳群が存在したことが分かってきた。

京都市域

伏見区醍醐にある栢杜遺跡は、昭和47年の調査によって文献にも記載された平安時代後期の八

角円堂、鎌倉時代初期の仏堂跡などが検出され、国の史跡に指定されている。今回の調査では、削平されているとはいえ、一辺約10mの建物基壇が検出され、平安時代後期に建てられた三重塔跡と推定されている。周辺からは、鎌倉時代の瓦類に加え、風鐸・風招片が出土している。左京区上高野では延喜式に記載された「小野瓦屋」に比定されている小野瓦窯跡の調査が行われた。藤原頼通の邸宅である高陽院などに供給された瓦類が出土し、また、窯が営まれた小丘自体が瓦窯関係の廃棄物の積まれたものであることも判明した。左京区慈照寺(銀閣寺)境内の調査は、調査面積は狭かったが、平安時代と室町時代の石列が重複して検出された。それぞれ、平安時代創建の浄土寺、室町時代に足利義政が造営した東山殿に関連するものと推定されている。

中京区元本能寺南町では、四条坊門通りの南側に設けられた幅４m、深さ約1.5mの規模をもつ惣構の堀が検出された。これで「本能寺の変」の舞台ともなった寺の南端がほぼ確定された。

また、上京区同志社大学構内においても、15世紀の溝が23m以上にわたって検出された。これは、戦乱に対応する法華宗総本山の一つ本満寺の防御用の堀跡と考えられている。左京区松ヶ崎小学校敷地内の調査では、平安時代から室町時代まで存続した礎石建物が検出された。文献に残る平安時代に創建され、名称を変えつつ室町時代まで存続していた松ヶ崎廃寺の御堂の一部と推定され、天文法華の乱で焼失したという記録とも一致している。近くでは州浜や池跡もあり、御堂の南側に浄土式庭園が広がっていた様子を窺うことができる

京都市伏見区にある淀城跡では、幅約８m、長さ40m以上の建物が検出された。基礎部分に溝を掘り、大量の河原石を埋め込んだ地業が施されており、江戸時代初期の築城時に建設された米蔵跡と考えられている。京都市右京区鳴滝の法蔵寺境内では、本年も引き続き尾形乾山窯の確認調査が行われた。一部のトレンチから多くの窯道具とともに陶器類も出土し、近傍に窯のあったことを改めて裏付ける成果が得られている。中京区御池中学校内の調査では、江戸時代前期の規模の極めて大きい地下室をもつ町家が検出された。地下室は花崗岩を積んで壁とし、南北９m、東西３mの規模で２か所に階段が設けられていた。また同じ調査地からは、江戸時代前期の真鍮の地金を製造していた工房跡が確認され、炉跡が20か所余や多数の坩堝が出土している。

南山城地域

八幡市美濃山廃寺では、寺域が東西93mであることが判明し、奈良三彩の大型の壺が出土している。木津川右岸、井手町の洪積世台地上に立地する井手寺跡の調査が実施され、柱間3.6mの礎石建物の一部が検出されるとともに、三彩を施した飾り瓦が出土した。一地方寺院の一般的な範疇を越えた寺の装飾が使用されていることから、この地域が地盤の橘諸兄との関係も類推されている。また、14年度には、隣接地で大安寺への瓦を焼成した石橋瓦窯が調査されている。

八幡市北部、木津川左岸の沖積地に立地する内里八丁遺跡は、道路建設に伴い、現在の防賀川に沿って調査が行われた。弥生時代末～古墳時代前期の竪穴式住居跡や溝、奈良時代末～平安時代にかけての掘立柱建物跡や井戸、中世の墓や島畠痕跡などが検出されている。横板井籠組の井戸は、内法一辺約１mで、その中に直径約70cmの円形縦板組の枠を設けるというものであった。井籠組井戸の横板には、「北三」「南四」などの組み立て順が板材に墨書されており、井戸底から

第３図　内里八丁遺跡井戸検出状況

は、土器・陶器類のほか銅製帯金具や銭貨「承和昌寶」が出土している。中世墓は12世紀末～13世紀初頭頃のもので、土師器皿、瓦器椀、短刀、同安窯系青磁椀が副葬されていた。主に須恵器、土師器が投棄された奈良時代の土坑から、唐三彩の一種の絞胎陶枕の小片が出土している。内里八丁遺跡をはじめ、上奈良・上津屋・内里五丁遺跡などが広がる付近一帯は、平坦な農地となり、工場・住宅・道路の建設が進む中で古代の景観を窺う術もないが、近年の調査でみると、弥生時代中期に始まり、弥生時代後期後半～古墳時代前期にかけてまとまった集落が形成され、以後、古墳時代後期、飛鳥時代、奈良～平安時代と続く。一帯は、延喜式記載の官営農場「奈良園」の推定地とされるのをはじめ、検出遺構や仏像、瓦類、陶枕などの出土遺物から、全容の把握は充分といえないが、寺院や官衙的なものの存在を類推させる要素が蓄積されている。

加茂町に所在する恭仁宮跡では、太極殿跡の北側が調査され、直径80cmを測る柱穴が検出され、回廊に伴うものではないか、と推定されている。城陽市芝山遺跡は、平成13年の試掘調査以来、道路新設予定地の調査を順次進めてきたが、15年度は対象地の北端部分で飛鳥～奈良時代の掘立柱建物跡群が検出された。その中でも８世紀前半に建設された一群は、３間×７間の東西棟建物を中心に倉庫を含め、方位を真南北に揃えた11棟が「コ」の字形に整然と配置されている。近傍に古北陸道を想定する案もあり、官衙的なものである可能性が高いと考えられるが、同郡内の北方約1.5kmにある正道官衙遺跡との関係もあり、性格を確定するには至っていない。

また、南山城地域では、山城町天上山古墳・薬師堂古墳、城陽市芭蕉塚古墳で部分的な調査が行われ、精華町では鞍岡山古墳の調査が行われている。京田辺市薪遺跡は、道路予定地で具体的な内容を知るための試掘調査を続けている。これまで縄文時代以降の包含層を検出しているが、今年度は奈良時代の溝に加え、縄文土器や埴輪片が出土している。山城町の沖積地にある西ノ口遺跡の試掘調査では、古墳時代から中・近世に至る遺物包含層が確認された。

発掘調査ではないが、宇治市では、平等院と宇治川をはさんで鎮座する国宝宇治上神社本殿と拝殿の建築部材について奈良文化財研究所による年輪年代測定が実施され、本殿は、1060年頃、藤原頼通によって造営された平等院と同時期の建築という結果が得られている。なお、ほかの数値からは、鎌倉時代初～中期にかけて造営・補修が続けられたことが判明している。

考古資料では、弥栄町奈具岡遺跡出土の玉作り関係資料が重要文化財として答申され、綾部市私市円山古墳出土品と大山崎町土辺古墳出土の家形埴輪などが京都府指定文化財となった。

（はせがわ・いたる＝当センター調査第２課長）

共同研究

庄内式甕の出現

高野　陽子

1．庄内式とは

弥生時代後期末～古墳時代初頭における土器の変遷の上で、弥生後期土器様式と古墳時代初頭土器様式を区分する最大の画期は何か。近年、奈良県纒向遺跡の層位的資料が豊岡卓之氏によって見直され[注1]、修正された層位的資料をもとに、新たな纒向新編年案が提示されるとともに、従来、庄内式とされてきた土器群の設定上の問題

点が改めて明確にされた。そのなかで豊岡は、弥生時代後期から古墳時代初頭に至る土器変遷の上で最も重視されるべきは、日常的雑器としての甕の形式変化ではなく、社会構造的変化を背景とした祭祀専用器種の成立にあり、小形祭式土器[注2]の出現に最大の画期を置くとし、新たに纒向様式を提示した。小形祭式土器への視点は、すでに1986年に寺沢薫が矢部遺跡で畿内古式土師器編年[注3]を提示した時点で注目し、庄内０式を設定した根拠の一つであったが、庄内０式後半で小形祭式土器が出現するとした寺沢に対して、豊岡が最古の土師器とする纒向２類古相の資料に小形祭式土器を内包する資料を提示した点は、画期をより明確に打ち出したものと言える。

庄内式設定の最大の根拠は、1965年の田中琢による庄内式の提唱[注4]以来、言うまでもなく庄内式甕の出現にあった。田中によって、当時、理念的に提示された庄内式の組成には、小形祭式土器のうち現在認識されるところの小形丸底鉢が含まれていたが、あくまで畿内第５様式の鉢の形式を受け継ぐとする認識にとどまるものであった。しかし、これに先行する原口による1962年の船橋遺跡の報告では、庄内式甕である甕Ｂと小形丸底土器が共伴する資料（Ｈ１）の存在が注目され[注6]、小形丸底土器を含まないＫ地区下層資料の形式群を併せてＫＩｂとし、小若江北式[注7]に先行する土器相と認識されていることから、小形祭式土器は、小若江北式の萌芽的性格をもつ土器相を模索するなかで、研究の当初から注視されていたのである。その後、庄内式成立をめぐる問題は、奈良県纒向遺跡[注8]における庄内式甕の出現を画期とした纒向２式の設定や、庄内式土器研究を牽引してきた米田敏幸による庄内式甕の変遷を基軸とした河内編年の構築などにみるように、主に庄内式甕の研究からアプローチされることになった[注9]。

ここにきて、古式土師器研究は、新たな局面を迎えている。各地で「庄内式併行期」という言葉が用いられているが、果たしてそこで論議される庄内式とは何か。庄内式は河内の一地域様式にとどまらず、社会変革論と結ぶ「畿内庄内式」と認識される一方、庄内式を構成する各形式の系統的な多様性によって、独自様式としての存立に論議を呼ぶものとなっている。庄内式を構成する代表的な器種は、庄内式甕・加飾二重口縁壺・有段高杯・手焙形土器・小形器台・小形丸底

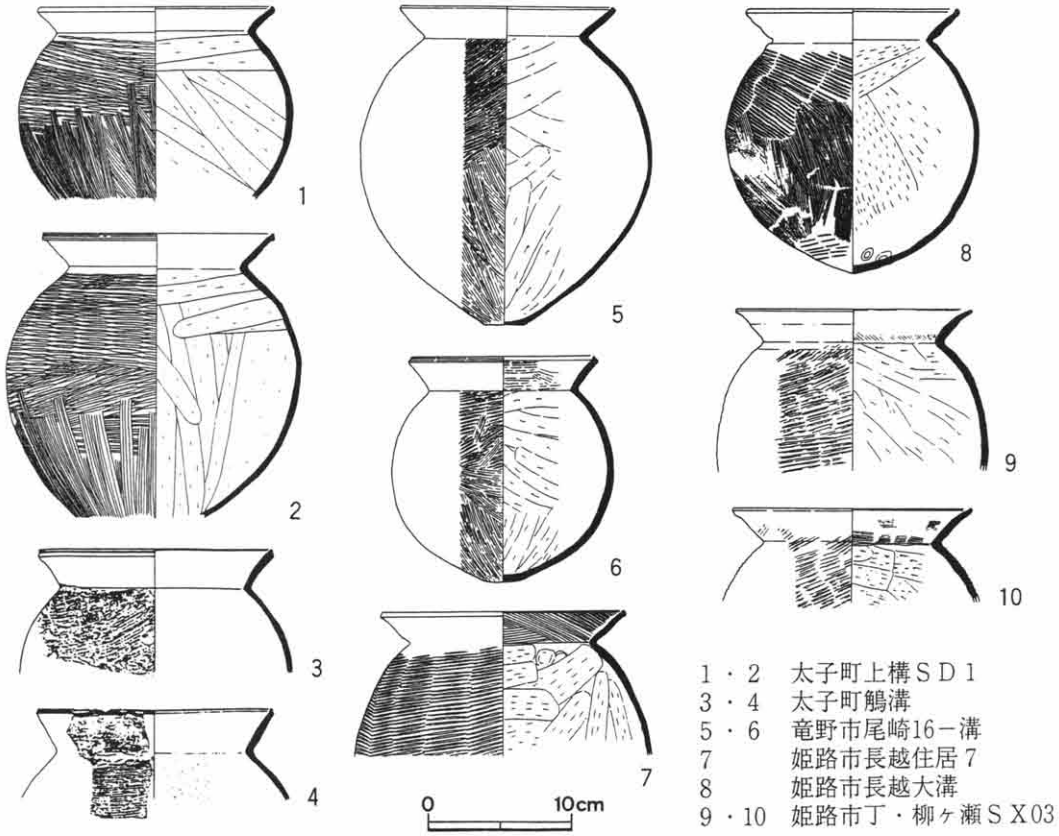
鉢とされる。このうち寺沢や豊岡が着目した小形祭式土器は、かつて赤塚次郎[注10]が指摘したように、東海に出自をもつ畿内東方地域の要素の強いものであるが、一方、庄内式甕は内面ヘラケズリ技法をもつ中部瀬戸内との技術的交流なしに生成し得ないものである。庄内式は、本来、異なる地域の系譜上にあるこれらの形式が、畿内中枢の中河内あるいは大和東南部で成立し、一つの様式を構成するものとして出現したことを前提に論じられてきたが、近年の資料増加は、それ自体が再検証の必要なものであることを示している。たとえば、小形祭式土器の出現は、近江・山城などの畿内東辺部では庄内式甕の出現に先行する可能性が高く、また、庄内式甕については播磨起源説が出され、河内・大和といった畿内中枢地域での生成説をあたかも前提として研究されてきた現況に対して再考を促すものとなっている。庄内式とは何か、多系統の複合的な要素から構成される庄内式は、その存立をめぐって様式概念自体を再検討すべきところにある。こうした視点から、小稿ではまず庄内式甕の出現と地域形式をを中心に検討し、その系統的な問題を明らかにしたい。

2．地域形式をめぐる問題

庄内式甕には、庄内河内形甕と庄内大和形甕[注11]という、二つの地域形式があることは広く知られている。体部外面に右上がりの細いタタキを施し、頸部内面にシャープな稜をなす河内形甕と、外面に左上がりのやや太いタタキを施し、頸部内面に鈍い稜をなす大和形甕である。大和形甕は、河内で早くから知られていた甕の形態に対して、奈良県纒向遺跡の調査において、河内と異なる形態的特徴をもつ甕がはじめて認識され、設定されたものである。庄内河内形甕は、近畿はもちろん、北部九州・北陸・山陰など、西日本を中心に広く移動していることが知られるが、庄内河内形甕に比べて移動の量的な規模は小さいとされる庄内大和形甕もまた近畿周辺だけでなく、北部九州・西日本をはじめ、さらに神奈川県・静岡県・千葉県など東日本各地にまでおよぶ[注12]。

従来、庄内式甕は、河内あるいは大和という畿内中枢地域で生成され、そこで生産された二つの地域形式が各地へ運ばれたと考えられてきた。しかし、1992年、大和東南部でみられる庄内大和形甕の胎土分析を行った奥田尚は、そのほとんどが流紋岩組成であるとし、在地産ではないとする驚くべき分析結果を発表した[注13]。これを受けた米田敏幸は、従来の庄内式甕の河内あるいは大和起源説に異議を唱え、大和形甕の製作地を畿内有数の流紋岩地帯である播磨とし、庄内式甕の播磨起源説とともに、「庄内播磨型甕」を提唱した[注14]。この説は、胎土分析に主導されつつも、播磨が第５様式[注15]甕のタタキ技法の盛行域の西端にあって、内面ヘラケズリを特徴とする瀬戸内系土器の様式圏と接する地域であるという、地域的な特性に着目したきわめて興味深い説であった。さらに米田は、庄内式甕は播磨で最初に生成され、庄内河内形甕の生成に影響を与えた可能性が高いと予見し、畿内中枢地域の優位性を象徴するものと考えられてきた庄内式甕の起源問題に再考を促した。

播磨起源説に対して、播磨の土器研究をすすめてきた岸本道昭[注16]や渡辺昇[注17]らは、庄内式甕が播磨で成立したとされたことへの戸惑いを隠さず、播磨の地域形式の存在は認めるものの、現状では



第１図　播磨の庄内式甕

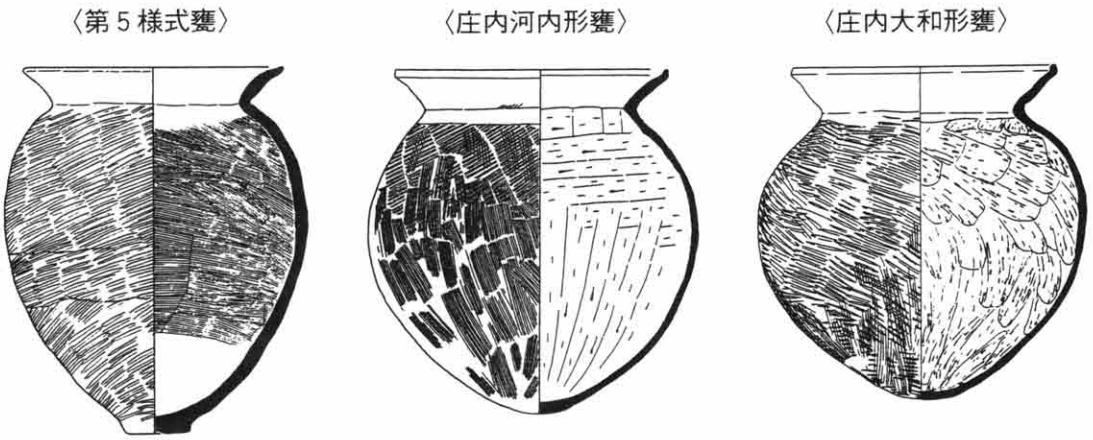
河内に先行する確実な資料は見い出せず、あくまで庄内河内形甕が先行し、播磨の庄内式甕はその影響下に成立すると考えるようである。また、先に纒向遺跡報告において「大和型」甕を提唱した関川尚弘も、播磨で庄内式甕が出現するのは纒向３式新段階とし、「大和型」の出現に遅れることから、その起源にはなり得ないとする。(注18) 摂津・播磨の土器集成を行った森岡秀人らも、やはり播磨産庄内式甕が河内形甕に先行する確実な事例がないことから、播磨起源説に否定的な見解を出している。(注19)

米田は、「庄内播磨型甕」を提唱した際、庄内大和形甕について、「大和の庄内甕は大和で作った庄内播磨型甕あるいはそれを模倣して製作された大和地方の地域的な甕」としている。大和形甕のオリジナルが「庄内播磨型甕」とする上記のような表現によれば、両者の特徴は基本的に同じと考えるところだが、型式的な特徴については具体的に語られていない。奥田の分析によれば、播磨の各遺跡にみられる庄内式甕の胎土はそのほとんどが流紋岩組成であり、播磨産である。(注20) その地域形式は、姫路市長越遺跡(注21)では確かに庄内大和形は全体の約50～60％を占めるが、同じ播磨の龍野市尾崎遺跡(注22)にみる庄内式甕は、細筋の右上がりのタタキを特徴とし、内面に鋭い稜をもつ庄内河内形甕であり、太子町上構遺跡(注23)・同鵤遺跡(注24)についても、庄内大和形甕を含むものの、主体はやはり河内形甕の範疇に属する。「庄内播磨型甕」が提唱された際、型式学的問題が語られなかったのは、こうした状況を見越したものであったのだろう。米田らによる播磨起源説は、生成の問題を正面から取りあげたものとして極めて重要であるが、型式学的観点から俎上にあげられ

たものではなかっただけに、これを否定的にみる論者と議論はかみ合わず、充分な検証がなされないまま現在に至っている。もちろん、播磨の庄内式甕について、型式学的観点からのアプローチが全く行われていないわけではない。岸本道昭は、従来の地域形式では庄内河内形に属するとみられる尾崎遺跡16－溝の播磨の胎土とされた庄内式甕について、典型的な河内形甕と異質な点として、「口縁部のつまみ上げられた外端面がやや内傾すること、口頸部直下外面のナデがないこと、底部の尖り方があまいこと」[注25]とする。また、播磨の庄内式甕の特徴として口縁端面に沈線をもつことをあげるなど、型式学的観点からその差異について注目し、播磨における地域形式を模索している。森岡秀人[注26]らが、摂津における播磨産庄内式甕の探索において、岸本が提示した型式的特徴を手がかりに作業を進めている点も、そうした視点の重要性を支持するものであっただろう。しかしながら、現況では、口縁端面の沈線など特徴的な手法は認められるものの、播磨の遺跡で普遍的に見出される特徴ある甕を把握できるまでの状況には至っていない。

3．第５様式甕との差異

庄内式甕の２つの地域形式、すなわち庄内河内形甕と庄内大和形甕があるとする点はこれまで広く受け入れられてきたが、出現期にはこうした枠組みでは捉えきれない庄内式甕が存在する。出現期の庄内式甕を検討した青木勘時は、「内面ヘラ削り以前のナデやハケ、つまみ上げの顕著ではない口縁や外反気味の口縁と底部に叩きの残る平底等の特徴をもつ」地域形式成立以前の甕に対して、「初期庄内甕」と呼ぶことを提唱している[注27]。おおよそその特徴は、米田河内編年で提示された庄内式甕[注26]Ａないしは Ｂに対応するが、この初期庄内式甕の検討こそ、庄内式甕の起源やその地域形式を考える上で、極めて重要な視点である。以下には、初期庄内式甕の属性を、第５様式甕と比較して検討し、その起源の問題について考察したい。なお、本稿ではタタキの傾斜方向に関して右上がりのタタキをもつ甕を初期庄内式甕Ａ、左上がりのタタキをもつ甕を初期庄内



・分割成形技法
・やや突出した平底
・右上がりのタタキ
・太筋のタタキ痕
・内面ハケ

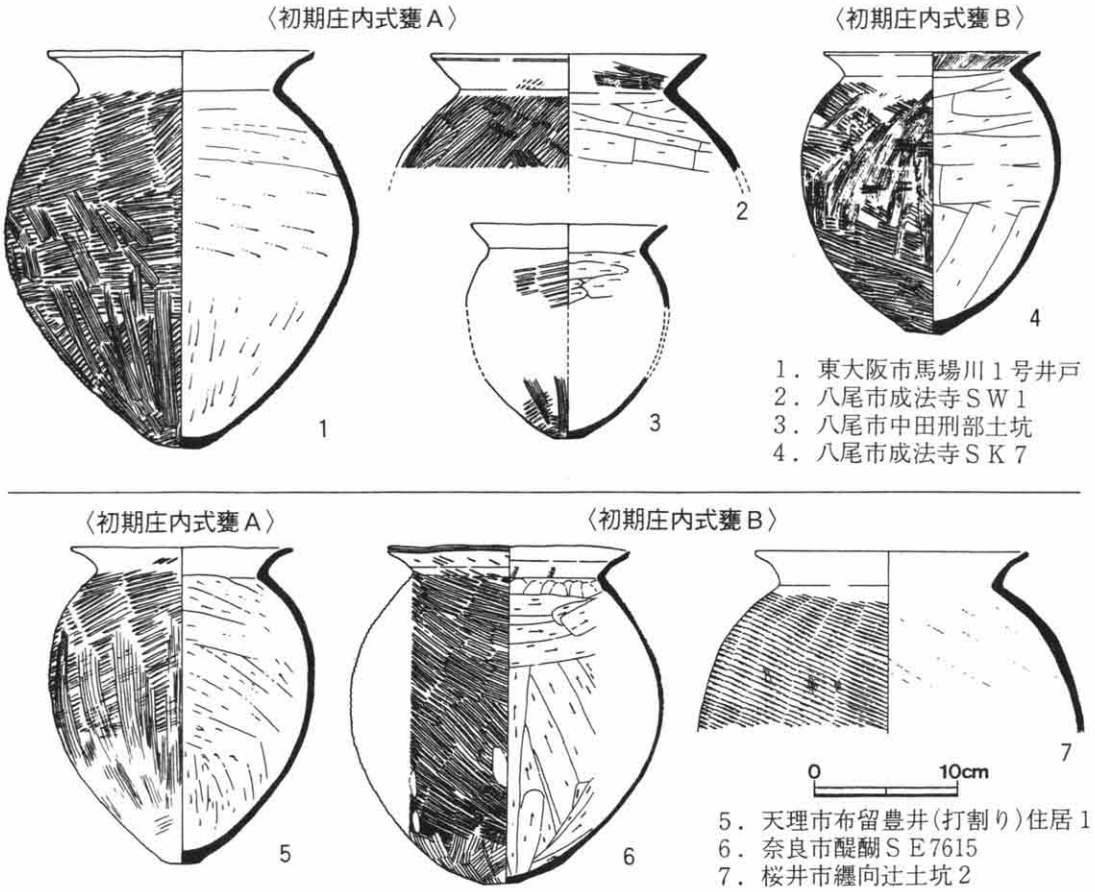
・右上がりのタタキ
・細筋のタタキ痕
・シャープに屈曲する頸部

・左上がり（ないしは水平）のタタキ
・やや太筋のタタキ痕
・鈍く屈曲する頸部

第２図　甕の特色

式甕Ｂとする。

庄内式甕として認識すべき、第５様式甕とは異質な「差異」とは何か。まず、視覚的差異となるのは、細筋化したタタキ痕であり、機能的差異となるのは内面ヘラケズリによる器壁の薄壁化である。また、形態的には底部形態の特徴、すなわち突出しない小さな平底をなす点も異なる属性として認識できる。しばしば問題とされる口縁端部の立ち上がり(つまみ上げ)に関しては、出現当初の形態は多様であり、第５様式甕と同様、単純に外反ないしは直線的にのびるものも多く、両者を画する決定的な要素とはならない。内面ヘラケズリによる薄壁化と細筋化したタタキ痕こそ、第５様式甕と初期庄内式甕を分かつ最も大きな差異であり、この点に関してはのちに詳述することにしたい。底部形態については、一般に庄内式甕の特色は尖り底であるとされるが、これは定式化の過程で現れるものであり、出現期の庄内式甕は小さな平底を特徴とする。第５様式甕は、いわゆる底部輪台技法によって作られた、やや突出した中央に浅い窪みをもつ底部を典型的な形態とするが、初期庄内式甕の底部は突出しない平坦な面をもつ平底で、対称的である。こうした初期庄内式甕の底部とその立ち上がりの特徴は、中部瀬戸内、なかでも吉備系甕にしばしば認められるものであり、その系譜に連なる属性と考えておきたい。以上から、第５様式甕との連続性を断ち切る最も重要な区分となる属性は、機能的属性である内面ヘラケズリと、形態的・視覚的属性である細筋のタタキ痕、さらには底部形態であるといえる。これらの要素を具備する甕



第３図　河内・大和の初期庄内式甕

を、はじめて第５様式甕から峻別して庄内式甕として認識することができる。逆に言えば、庄内式甕の起源を探るには、これらの属性をもつタタキ甕が、どの地域ではじめて出現し定量的に確認できるのか検討されねばならない。

４．畿内とその周縁部の内面調整

まず、内面ヘラケズリについてみて行こう。内面ヘラケズリは、庄内式甕出現前夜の畿内において、一般的な技法ではない。各地の代表的な弥生時代後期末～古墳時代初頭の遺跡を一例にと例えば奈良県纒向遺跡東田地区南溝(北部)黒色粘土層２では約０％(０／19点)、大阪府瓜生堂遺跡Ｂトレンチ古墳時代前期下層[注28]では約０％(０／29点)、京都府佐山遺跡[注29]ＳＨ415では約６％(１／16点)であり、畿内中枢および山城では内面ヘラケズリの出現頻度は極めて低く、ハケおよび板ナデを含むナデ調整が第５様式甕の属性として広い地域で強く維持されていることが窺われる。

一方、これらの地域とやや異なる様相をみせるのは、摂津である。尼崎市田能遺跡大溝[注30]では第第１Ｂ地区16.6％(５／30点)であり、畿内中枢ないしは西部地域にくらべてタタキ甕にみる内面ヘラケズリの出現頻度はやや増加する。しかし、摂津よりもさらに内面ヘラケズリ盛行地域である中部瀬戸内に地理的勾配が高まる播磨において、内面ヘラケズリがより高率でみられるかといえば必ずしもそうではない。播磨は、弥生後期中葉後半段階には、タタキ甕の内面調整はヘラケズリが卓越する。例えば赤穂市周世入相遺跡土壙22[注31]では、外面タタキを施す甕７点のうちハケ調整を確実に伴うものは、やや体部のプロポーションを異にする１点のみであり、タタキ甕の内面調整は基本的にヘラケズリである。同時期の畿内では、タタキ甕の内面はすでにハケ調整が基本属性であり、畿内中枢地域とは様相を異にするものとして注目される。ところが、同じ周世入相遺跡でも、時期的に後期後葉に下がる同遺跡土壙20では、タタキ甕はわずか２点ながら、いずれもハケ調整を行っており、後期中葉から後葉へ至る過程で、タタキ甕の内面調整はハケからケズリへと転換していると考えられる。こうした後期後葉の内面ハケ調整の盛行は、播磨の代表的な遺跡である播磨町大中遺跡[注32]においても同様であり、第１土器群では実に約96％を占める。ケズリが施されているのは、全72点中わずか３点であり、そのうちの２点も一部に施されるに過ぎない。大中遺跡の事例は、周世入相遺跡の事例を参考にすれば、播磨のなかの特殊な在り方とは考えられない。以上のような後期後葉におけるタタキ甕にみる内面調整の変化、すなわちハケ調整への傾倒は、この時期に播磨が畿内との関係性を強めたことの証左と言える。播磨は、地理的には瀬戸内東部にあたり、後期を通じて瀬戸内系土器が搬入される地域であり、後期中葉までは内面ヘラケズリの盛行地域となるが、後期後葉には一転して畿内系土器の影響が強まり、内面ハケ調整を堅持する地域へと変容すると考えられる。後期後葉～末まで、断続的に瀬戸内系土器の搬入がみられる一方、あくまで内面ハケ調整のタタキ甕を甕の主要形式として堅持し、折衷土器さえほとんど生み出していない状況を考えると、そのなかから果たして庄内式甕が生み出される契機が現れるのか疑問である。播磨では、庄内式甕出現の前段階に瀬戸内系土器と濃厚な接触を果たしているにもかかわらず、タタキ甕に内面ヘラケズリが採用されないという事実は、庄内式甕の播

磨起源説の成立を困難なものにしていると言わざるを得ない。

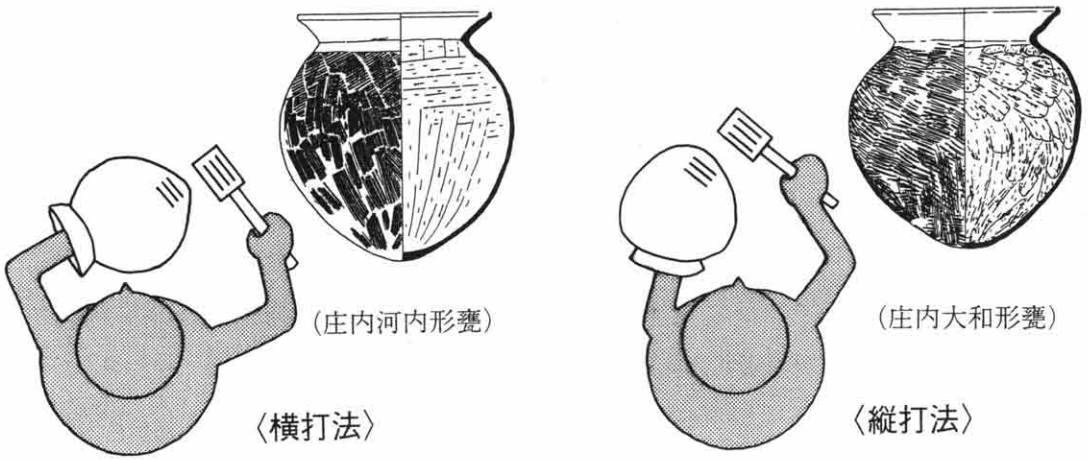
以上のように、畿内中枢とその周辺域では、第５様式のタタキ成形の甕のうち、内面ヘラケズリを施す甕は極めて客体的な存在であり、瀬戸内地方と濃厚な接触をしてきた地域でさえもその状況には変わりがない。庄内式甕における内面ヘラケズリの採用がいかに唐突なものであったか、庄内式甕の生成のためには、タタキ技法と内面ヘラケズリを昇華する別段の契機を必要とすると考えられる。畿内中枢地域では、河内刑部土坑(注33)にみるように、庄内式甕の出現段階に吉備系を中心とする瀬戸内系土器が多量に流入している。内面ヘラケズリを特徴とする山陰系土器の流入に先行するものである。伝統的第５様式の世界にあって、いかにも唐突な内面ヘラケズリの採用や突出しない平底を特徴とする初期庄内式甕の出現は、こうした瀬戸内系土器、なかでも折衷土器を生み出すなど人の移動を伴って多量に搬入された吉備系土器の流入と軌を一にするものであり、これを契機としたと考えられる。

５．二つのタタキ技法

先に、第５様式甕と初期庄内式甕を区分する「差異」は、内面ヘラケズリと突出しない平底の底部、さらに細筋のタタキ痕とした。第５様式甕にみるタタキ痕の条数は、例えば平均的な大きさの甕では、山城佐山遺跡では１cmあたり約1.5～2.5本であり、この傾向は後期後葉の播磨町大中遺跡、八尾市亀井遺跡でも同様である。一方、初期庄内式甕では、奈良市醍醐遺跡ＳＥ7615(注34)、東大阪市馬場川遺跡１号井戸(注35)などの平均はおおよそ１cmあたり約３～４本、八尾市美園ＣＳＤ320(注36)、馬場川遺跡では約４～５本となり、細筋化は明らかである。初期庄内式甕を第５様式甕から分かつ属性のうち、タタキの細筋化の問題は、内面ヘラケズリや底部形態のように系統的に異質な要素ではなく、伝統的第５様式甕の盛行地域であれば、そのタタキ技法の発展のなかでとらえることが可能である。条痕の細筋化は、内面ヘラケズリと切り離して考えることはできず、器壁の薄壁化の過程でその均一性を実現するために、タタキ工具は必然的に細筋化を指向したものと考えられる。

第５様式甕と比較するとき、今一つ見落とすことのできない差異はタタキ痕の方向である。これは大和形甕に限ったものであるが、大和形と河内形がほとんど同時に出現したとする見解があるなかでは、庄内式甕の出現および地域形式の問題を考える上では重要であるため俎上にあげておきたい。一般に、後期後葉～末の畿内において、甕のタタキは右上がりが通有であり、大和形甕にみるような左上がりは稀である。例えば、大和の後期後葉の基準資料である四分遺跡ＳＤ666(注37)出土資料では、右上がりが約12％（３／26点）を占め、また、同じ四分遺跡ＳＥ760出土資料でも、15点出土している第５様式甕のすべてが右上がりである。大和の第５様式甕には右上がりのタタキが強く維持されているのに、なぜ大和の庄内式甕は左上がりを基調とするのか。

タタキの条痕の方向は、特定の方向を持つものが卓越する地域があることを考えたとき、利き腕の別が主因でないことは明らかである。纒向遺跡で大和形甕を提起した関川尚弘は、右上がりと左上がりの違いは、タタキを施す際、土器の底部を地につけ正置させるか、あるいは横転させ

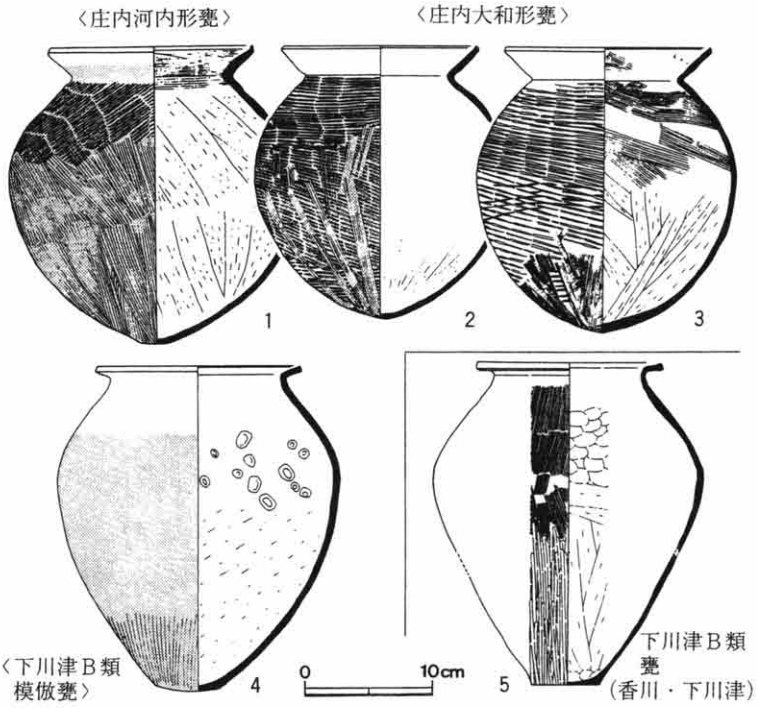


第４図　庄内式甕のタタキ技法

るかの違いであろうと推定[注38]し、庄内大和形甕は正置してタタキを施したものとする。タタキの傾斜方向に関しては、後期の甕は右上がりのタタキを強く堅持するのに対し、畿内の弥生中期土器のタタキ痕の多くは左上がりである。また、後期の資料でも右上がりのタタキを主体とするなかにあって、大形品のみ左上がりのタタキの出現比率が高くなるものがある。こうした点や、さきにあげた中期土器の器高が大きく、大形品の倒置が難しいことを考えれば、そこにみられる左上がりタタキは底部を床に置き正置して施すことを基本とすると考えられる。しかし後期の中・小形の甕は手持ちが可能で、底部にタタキを施すものがあることを考えると、豊岡卓之が指摘するように、「素地甕(タタキ直前の甕)の口縁方向を手前にして体部のなかに腕を差し込んで指で支持[注39]」したとみるのが自然である。古代の土器製作における利き手は右利きが基本とされる[注40]が、右利きの製作者が製作したとすれば、左手で身体に対して縦(倒位)に土器を維持することによって、左上がりのタタキ甕ができるのであり、同じく身体に対して横に土器を維持することによって右上がりのタタキを施すことが可能となる。庄内式甕は、体部中位下半にタタキの傾斜変換点がみられるから、左上がりのタタキ痕をもつ大和形甕の場合は、底部周辺の連続螺旋タタキが終了した時点で、やや横方向(右)に軸を傾け、一方、右上がりのタタキ痕をもつ河内形甕の場合は、逆に主軸方向(左)にやや戻すという行為がとられたのであろう。大和形甕が、第５様式系甕や庄内河内形甕と異なる方向のタタキ痕をもつのは、身体の軸に平行となる縦位に、かつ倒立させて左手で支持する(以下、縦打法とする)という点にあり、前者が横位を取る(以下、横打法とする)のと基本的に異なるためである。大和形の場合、底部にタタキ痕をもつ甕が多いが、底部周辺にタタキを施す際、上から工具をあてる状態になるためにこのようなタタキ痕が増加すると考えられる。また、河内形に比べてタタキ痕の傾斜角度の変換点がより下位に位置する場合が多いのも、底部周辺の連続螺旋タタキがほぼ真上から施されるため、下半の連続螺旋タタキが短い単位で仕上げられることによるとみられる。

後期後葉～末において、畿内周辺部で左上がりのタタキが定量的にみられる地域は、播磨と四国東部である。例えば播磨大中遺跡では、左上がりのタタキの出現頻度は約14％(11／76点)、川

島遺跡20溝では約20%(7／35点)と、畿内中央部の遺跡に比べて明らかに高い。この傾向は、播磨と盛んな土器交流がみられる四国中・東部でも同じである。なぜ、この地域で左上がりのタタキの出現頻度が高くなるのであろうか。その点に関して重要と思われるのは、四国中・東部の在地系土器の製作手法である。四国中部には「下川津B群」[注41]とされる多量の角閃石細片を胎土中に含む土器がみられるが、これらの壺や甕にみられる調整の特徴は、体部内外面の調整がともにほぼ垂直に施される点である。つまり土器の製作に関して、製作者に対して土器を常に「縦位」に保持している点に大きな特徴がある。下川津B群の土器を検討した大久保徹也によれば、播磨では川島遺跡20溝[注42]や播磨長越遺跡など下川津B群の模倣土器が多く出土しているとされる[注43]。すなわ第5様式甕と四国系土器の製作技法の接点となる地域であり、四国系土器にみる「縦位」の技法が第5様式甕の製作技法にも影響を与え、その結果、左上がりのタタキの出現比率が増すと考えられる。



第5図　姫路市長越遺跡出土の甕

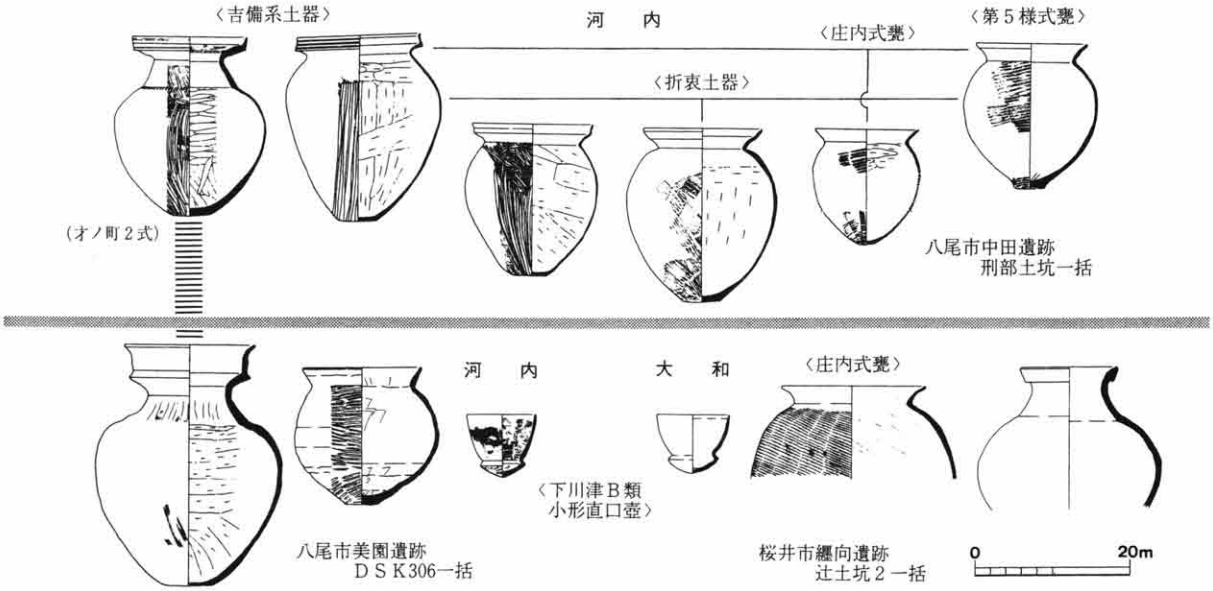
6．庄内式甕の出現

庄内式甕の出現をめぐっては、河内・大和に大きな時期差はみられないとされるものの、その前後については従来から見解の相違があった。かつて米田敏幸は、庄内式甕出現前とされた纒向遺跡辻土坑2が小形器台を伴うことにより、河内では庄内式甕の出現後の現象であるとして、庄内式甕の生成は河内がやや先行するとした[注44]。これに対して、関川尚弘は出現期の資料のなかにはすでに大和形と河内形の分化の兆候がみられるものがあり、両者はほぼ同時に出現し、出現当初から河内形甕と大和形甕は別の道を歩んだとしている[注45]。庄内式甕の生成地をめぐっては、「河内生成説」、「河内・大和二元的生成説」に加えて[注46]、近年では新たに米田が大和形甕の胎土の問題から「播磨起源説」を提示し、混沌とした状況を呈している。

第4節でも述べたように、播磨の庄内式甕は、現状では最も古いと考えられる播磨長越遺跡の庄内式甕[注47]でさえ、おおよそ庄内式中～新相に対応するものであり、具体的な資料によって起源論を語ることは難しい状況である。播磨は東部瀬戸内の一角を占め、内面ヘラケズリ技法は、弥生時代後期中葉まで主体的にみとめられるが、後期後葉には一転して内面ハケ調整に代わり、さら

に後期末にその傾向を強めるという状況にあり、長期にわたる瀬戸内系土器との濃厚な接触がありながらも、第５様式甕との技法的な融合はみられない。また、庄内期最古段階に対応する資料としては、小形器台および有段高杯の型式から川島遺跡20溝をあげることができるが、この段階においても30点を超える第５様式甕はほぼすべてに内面ハケ調整が施され、かえって畿内的な要素を強めている。播磨の弥生時代後期末前後の土器様相に、庄内式甕の生成へ発展的に捉えられる要素は認められないことから、畿内中枢地域に先んじた庄内式甕の生成、すなわち「播磨起源説」の成立は困難であると言わざるを得ない。

次に、河内と大和における出現時期に関しては、河内最古の資料とされる中田遺跡刑部土坑と大和の纒向遺跡の資料を比較しておきたい。刑部土坑出土資料は、吉備系土器が過半を占め、ほかとの比較が極めて難しい資料である。これを大和で庄内式甕がはじめて出現する纒向遺跡辻土坑２出土資料(寺沢編年庄内１、豊岡編年纒向２類)と比較する場合、讃岐下川津Ｂ類の搬入品である讃岐⑤段階[注48]とみられる小形直口壺が参考になる。ほぼ同型式と考えられる小形直口壺は河内では美園遺跡ＤＳＫ306に出土例があるが、この資料に共伴する吉備系壺は頸部が長く拡張して立ち上がる形態をなし、おおよそ高橋編年Ⅳ－ｃ期[注49]に該当する。一方、吉備の極めて忠実な模倣土器とされる中田遺跡刑部土坑の吉備系壺は、擬凹線文をもち頸部が短く立ち上がるもので、ＤＳＫ306の壺よりも型式的に古く、高橋編年Ⅸ－ｂ期および上東編年のオノ町２式古相に帰属するとみられる[注50]。小形直口壺および吉備系壺を手掛かりに比較した場合、刑部土坑資料は、美園ＤＳＫ306よりも型式的には古く位置づけられることから、美園とほぼ同時期とみなされる辻土坑２に先行するものとみておきたい。以上から、現状では大和における庄内式甕の出現は、河内に遅れる可能性が高く、庄内式甕の生成は河内において実現されたと考えることに齟齬はない。この点に関して、奥田尚による大和の初期庄内式甕の胎土分析では、醍醐遺跡ＳＥ7615出土資料は、「大和形庄内甕と考えられるものがすべて河内産[注51]」とされ、出現間もない段階の河内産の庄



第６図　初期庄内式甕と共伴資料(河内・刑部土坑と大和・辻土坑２)

内式甕(初期庄内式甕B)が大和に搬入されている可能性が高いとされる。また、天理市布留遺跡豊井(打破り)地区土坑2出土の初期庄内式甕Aも生駒西麓産とされ、こうした分析結果は庄内式甕の河内生成説を補強するものと言えよう。

河内において庄内式甕が最初に生成された背景には、かつて米田敏幸が指摘(注52)し、最近では青木幹時が指摘(注53)したように、この地域が吉備系土器の流入において畿内の拠点的な地域となり、吉備系土器の製作手法を最初に受容した地域であったことによると考えられる。庄内式甕生成期における内面ヘラケズリ技法の受容に関しては、前述したように播磨を媒介として考えることは困難であり、ダイレクトな瀬戸内系土器の流入を考えざるを得ない。当該期の河内では、吉備系土器が相応の規模をもって搬入されることから、その影響によって内面ヘラケズリという新たな甕製作手法が受容されたとみることが妥当であろう。第3節でも述べたように、内面ヘラケズリに加えて、初期庄内式甕の底部の形態的特徴からも、吉備系土器との関係は明らかである。その受け入れ口となった中河内の沖積地において、はじめて第5様式甕との接点が生まれ、均一な薄壁化を図るために細筋のタタキ工具が開発され、新たなタタキ甕が生み出されたものと考えられる。

庄内式甕が河内において第5様式甕と吉備系土器との接触によって生み出されたとしても、第5様式の右上がりのタタキの世界にあって、なぜ左上がりで太筋のタタキを特徴とする大和形甕が生み出されるのかという問題は依然として残る。左上がりのタタキ痕を残すタタキ技法がどのようなものであるのか、右上がりのタタキ痕を残すタタキ技法との違いについては第5節で詳述した。大和形甕にみる左上がりのタタキ痕を残すためは、甕を体の軸に対して、平行にかつ倒立して保持することが必要であり、具体的には豊岡卓之が明らかにしているように、右利きの製作者が左手を土器に差し入れ、倒立させタタキを施すことになる。これに対して、第5様式甕および庄内河内形甕は、土器を身体に対して横位に保持する、すなわち右利きの製作者が土器に左手を差し入れ、口縁を左側に向けタタキを施すことになり、その違いは身体に対し土器を「縦位」に保持するか(縦打法)、「横位」に保持するか(横打法)の違いということになる。庄内大和形甕にみる左上がりのタタキは、第5様式甕の横打法を堅持していた世界に、異質な縦打法の技法が取り込まれたことを意味する。この縦打法により製作される土器こそ、外面調整を縦ミガキおよび縦ハケ調整を主とする吉備系土器ないしは四国系土器である。

庄内大和形甕の生成には二つの仮説が考えられる。一つは、播磨との関係を考えるものである。第5節で述べたように、播磨では後期後葉において左上がりのタタキの比率が畿内中枢地域に比して高く、その背景として下川津B群に代表される四国系土器の「縦位」の技法が影響を与えたのではないかとした。下川津B群の模倣土器が多く出土する長越遺跡では、限られた資料ながら、庄内式甕出現前の資料にみる第5様式甕に左上がりのタタキが特徴的にみられ、庄内大和形甕を考える上で注目される。ここから考えられる一つの仮説は、庄内式甕は河内で生成されたのち、程なく大和・播磨へ波及し、播磨の縦打法による左上がりタタキをもつ第5様式甕をベースに新たな庄内式甕を生成させたものとし、庄内大和形甕成立の背景に、播磨西部と大和東南部との緊密な関係を想定するものである。こうした見方をすれば、「庄内播磨型甕」の問題で明らかにさ

れた、庄内大和形甕の胎土が播磨の土器と同様の流紋岩組成とされる点や、大和形甕の太筋のタタキ痕(長越遺跡にもみられる)の問題も理解しやすいが、現段階では播磨における庄内式甕の出現は明らかに大和に遅れ、この仮説の成立を困難なものにしている。

今一つは、吉備系土器の製作者が相応の規模をもって大和に集住し、在地の土器制作者とともに庄内式甕を製作したために、吉備系土器の「縦位」の土器製作技法が、大和形甕の左上がりのタタキを生み出す縦打法として受け継がれたとみる見方である。出現期の段階には、右上がりのタタキ痕をもつ初期庄内式甕Aと左上がりのタタキ痕をもつ初期庄内式甕Bは、その比率を問わなければ河内・大和ともに混在する状況にある。このなかから大和においてのみ縦打法による初期庄内式甕Bが定着する背景に、甕製作において伝統的に「縦位」技法をもつ吉備系土器製作者の大和東南部への集住を考えるものである。すなわち、古墳の築造を契機として吉備系土器製作者の集住が進められ、「縦位」の製作技法が大和東南部を中心に広がり、庄内大和形甕の製作手法が確立したと考えるものである。河内において、吉備系土器の製作者によって持ち込まれた縦打法が定着しなかったのは、大和に比べてその受け入れが集約的でなかったことによるとみることができよう。

以上、雑駁な論を重ねたが、庄内式甕の生成は、吉備系土器の流入の拠点となった河内において、第5様式甕との融合が行われたことによるとした。また、庄内大和形甕の出現の問題については、播磨の庄内式甕の出現が畿内中枢地域に明らかに一段遅れる状況にあることから、縦打法をもつ吉備系土器製作者の大和東南部への集住を背景に考えることが妥当と言えよう。しかしながら、大和形甕の太筋のタタキ痕の問題や、あるいは流紋岩組成とされる胎土の問題など、解決されるべき課題は多い。古墳時代の土器形式を代表する庄内式甕出現の問題は、庄内式の様式論に関わると共に、古墳出現期の社会的・政治的背景を探る上で極めて重要な課題であり、今後も畿内周辺地域との関係を視野に入れ、検証を重ねて行くことにしたい。

本稿は、平成13・14年度に採択された土器の広域移動と地域間交流についての共同研究の成果に基づくものである。主担当を高野、副担当を調査2課主任調査員松井忠春とし、共同で資料調査を行い、分担して実測および計測したデータを、本稿の基礎資料とした。資料収集を通じて、各関係機関および以下の方々に多大なご協力を得たことを深謝したい。

今井涼子・岩崎茂・加藤良彦・岸本圭・岸本道昭・土井和幸・小池佳津江・菱田淳子・深澤芳樹・三村修次・森下大介・安英樹(五十音順・敬称略)。

(たかの・ようこ＝当センター調査第2課調査第3係調査員)

注1　豊岡卓之「『纏向』土器資料の基礎的研究」(『纏向遺跡の研究』　橿原考古学研究所付属博物館編)　1999

注2　いわゆる小形精製土器のうち、小形器台・小形丸底鉢を指すものとする。

注3　寺沢薫「畿内古式土師器の編年と二、三の問題」(『矢部遺跡』　橿原考古学研究所)　1986

注4　田中琢「布留式以前」(『考古学研究』12－2　考古学研究会)　1964

注５　小形丸底土器のうち、口径あるいは体部最大径が器高を凌駕するものとされる(注３文献参照)。

注６　原口正三『河内船橋遺跡出土遺物の研究(2)』　大阪府教育委員会　1962

注７　坪井清足『岡山県笠岡市高島遺跡調査報告』　笠岡市教育委員会　1956

注８　石野博信・関川尚功『纒向』　桜井市教育委員会　1976

注９　米田敏幸「中河内の庄内式と搬入土器」(『考古学論集』　考古学を学ぶ会)　1985

注10　赤塚次郎「東海系器台覚書」(『庄内式土器研究』Ⅳ　庄内式土器研究会)　1993

注11　寺沢薫が提示した様式論に基づいた形式分類を用い、庄内大和形甕あるいは庄内河内形甕とする(注３文献参照)。

注12　米田敏幸「庄内式土器研究の課題と展望」(『庄内式土器研究』ⅩⅣ　庄内式土器研究会)　1997

注13　奥田尚「大和型庄内甕の砂礫種構成とその移動」(『庄内式土器研究』Ⅲ　庄内式土器研究会)　1992

注14　米田敏幸「庄内播磨型甕の提唱」(『庄内式土器研究』Ⅲ　庄内式土器研究会)　1992、前掲注９文献

注15　「第５様式甕」は、畿内で弥生時代後期中葉以降盛行する、外面にタタキ、内面にハケを施す甕をさすものとする。

注16　ａ岸本道昭「庄内甕播磨発生説考」(『庄内式土器研究』Ⅹ　庄内式土器研究会)　1995
ｂ岸本道昭「西播磨の庄内式前後」(『庄内式土器研究』ⅩⅠ　庄内式土器研究会)　1996

注17　渡辺昇「長越遺跡の庄内式土器」(『庄内式土器研究』ⅩⅠ　庄内式土器研究会)　1996

注18　関川尚功「いわゆる「庄内播磨型甕」と大和・河内の庄内甕」(『庄内式土器研究』Ⅳ　庄内式土器研究会)　1993

注19　森岡秀人「摂津における土器交流拠点の性格」(『庄内式土器研究』ⅩⅩⅠ　庄内式土器研究会)　1999
森岡秀人・中井秀樹・濱野俊一「庄内式併行土器の様相をめぐる摂津地域の動向」(『庄内式土器研究』ⅩⅡ　庄内式土器研究会)　1996

注20　奥田尚「庄内甕の砂礫構成とその産地」(『庄内式土器研究』ⅩⅠ　庄内式土器研究会)　1996

注21　松下勝ほか『播磨・長越遺跡』　兵庫県教育委員会　1978

注22　古本寛ほか『尾崎遺跡Ⅱ』　龍野市教育委員会　1995

注23　渡辺昇ほか『上構遺跡』　兵庫県教育委員会　1990

注24　松本正信「考古学からみた太子町」(『太子町史』第３巻)　1989

注25　前掲注16ｂ文献

注26　前掲注19文献

注27　青木勘時「大和における庄内甕の動向－特にその初現期から盛行期にかけての在り方について(前・後編)」(『みずほ』第13・15号　大和弥生文化の会)　1994・1995

注28　(財)大阪府文化財調査研究センター編『河内平野遺跡群の動態』Ⅳ　1998

注29　高野陽子・森島康雄ほか『京都府遺跡調査報告書第33冊―佐山遺跡―』　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター　2003

注30　福井英治ほか『田能遺跡』　尼崎市教育委員会　1982

注31　甲斐昭光『周世入相遺跡』　兵庫県教育委員会　1990

注32　山本三郎ほか『播磨大中遺跡の研究』　播磨町教育委員会・播磨町郷土資料館　1990

注33　高木真光ほか『昭和53・54年度埋蔵文化財発掘調査年報』　八尾市教育委員会　1981

注34　橋本義則ほか『飛鳥・藤原京発掘調査概報』23　奈良国立文化財研究所　1993

注35　福永信雄・芋本隆裕ほか『馬場川遺跡発掘調査報告』　東大阪市遺跡保護調査会　1977

注36　渡辺昌宏ほか『美園』　大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター　1985

注37　木下正史ほか『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅲ　奈良国立文化財研究所　1980

注38　前掲注８文献

注39　前掲注１文献

注40　佐原真「弥生式土器製作技術に関する二三の考察」(『私たちの考古学』20)　1959

注41　大久保徹也ほか『下川津遺跡』　香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財センター　1990

注42　石野博信ほか『川島・立岡遺跡』　太子町教育委員会　1971

注43　前掲注41文献

注44　米田敏幸「庄内式土器研究会会誌刊行にあたって～畿内古式土師器に関する二つの仮説～」(『庄内式土器研究』Ⅰ　庄内式土器研究会)　1992

注45　関川尚功「大和型庄内甕の現況」(『庄内式土器研究』Ⅱ　庄内式土器研究会)　1992

注46　青木勘時「大和における古墳出現前後の土器様相とその特質」(『古墳出現期の土師器と実年代』(財)大阪府文化財センター)　2003

注47　前掲注17文献

注48　大久保徹也「四国北東部地域における首長埋葬祭祀様式の画期―土器編年との対応関係について―」(『古墳出現期の土師器と実年代』　(財)大阪府文化財センター)　2003

注49　高橋護「弥生時代終末期の土器編年」(『研究紀要９』　岡山県立博物館)　1988

注50　柳瀬明彦『川入・上東』　岡山県教育委員会　1977

注51　奥田尚「庄内甕の砂礫構成とその産地」(『庄内式土器研究』ＸＩ　庄内式土器研究会)　1996

注52　前掲注９文献

注53　前掲注46文献

参考文献　(財)八尾市文化財調査研究会『成法寺遺跡―八尾市光南町１丁目29番地の調査―』　1983
天理大学付属天理参考館『天理参考館報第５号』　1992

補注　本文中で用いた「畿内」という表現に関して、本来、弥生時代の地域区分に用いるべき用語ではないが、簡潔かつ具体的に近畿地方の中央部を指すことができるため使用している。

17. 園部（そのべ）城跡第５次

所 在 地　船井郡園部町小桜97

調査期間　平成16年１月21日～２月25日

調査面積　約280㎡

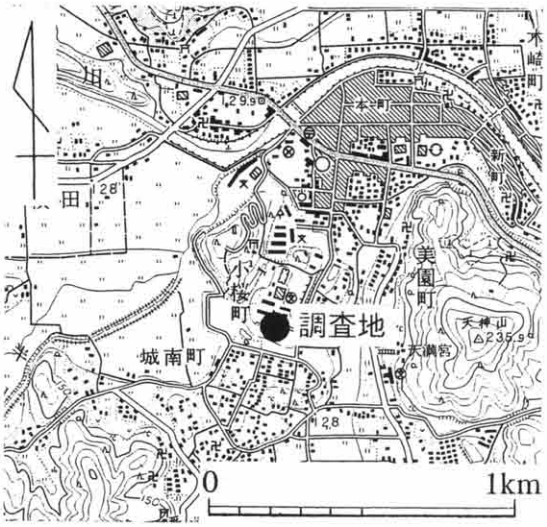
はじめに　今回の調査は、京都府立園部高等学校運動場広場建設に伴うものである。園部城跡は、但馬出石城主小出信濃守吉親の陣屋として、元和５(1619)年に造営が始まった。以降、明治４年の廃藩置県により廃城となるまで、約250年間園部藩主小出氏の居城となった。

今回の調査地は、本丸の南側に位置する標高136ｍ前後の郭状の平坦面である。

調査概要　調査の結果、上層において、炉跡と見られる石組み遺構・土坑・柱穴などの遺構を検出した。土坑からは、主として18世紀代の伊万里・唐津・丹波・清水などの近世陶磁器類が出土した。下層には、炭・灰を多く含む大型の土坑(ＳＸ19)があり、この土坑を埋めて形成された整地面が認められた。ＳＸ19は不定型な性格不明の大形土坑であるが、ここからは、多量の瓦に混じって、17世紀代を主体とする陶磁器類が出土した。伊万里・丹波などの陶磁器とともに土師器灯明皿などが良好な状態で出土した。遺構掘削後、トレンチ中央部に深さ約１ｍの断ち割りをした。この結果、掘削部位は全て盛土であることが確認された。盛土は、本丸の周囲をめぐっていた内堀から中堀へ向かって行われ、中堀側に傾斜する幾層もの堆積土層が観察された。これにより、江戸時代の遺構形成面である平坦地形は、簡易な造作によるものではなく、大がかりな土木工事により形成された盛土遺構であることが判明した。この遺構は、ＳＸ19形成以前のものであるから、江戸時代前期に陣屋遺構として形成されたものと考えられる。

まとめ　今回の調査では江戸時代前期～後期にかけての生活遺物と遺構を確認した。調査地は、安政年間に描かれた絵図によると、厩・士屋敷・下台所などが描かれている。この調査では、屋敷跡の遺構を検出することはできなかったものの、生活雑器類を含む土坑など多数の遺構を検出した。これらは絵図に対応する生活遺構が近隣に存在したことを裏付けるものと考えることができる。また、安政期の絵図に描かれたこの場所が、江戸時代初期に形成された可能性が高まった。

（田代　弘）



調査地位置図(国土地理院1/25,000園部)

18. 馬路（うまじ）遺跡第３次

所 在 地　亀岡市馬路町壁木・梅原ほか

調査期間　平成15年10月29日～平成16年２月20日

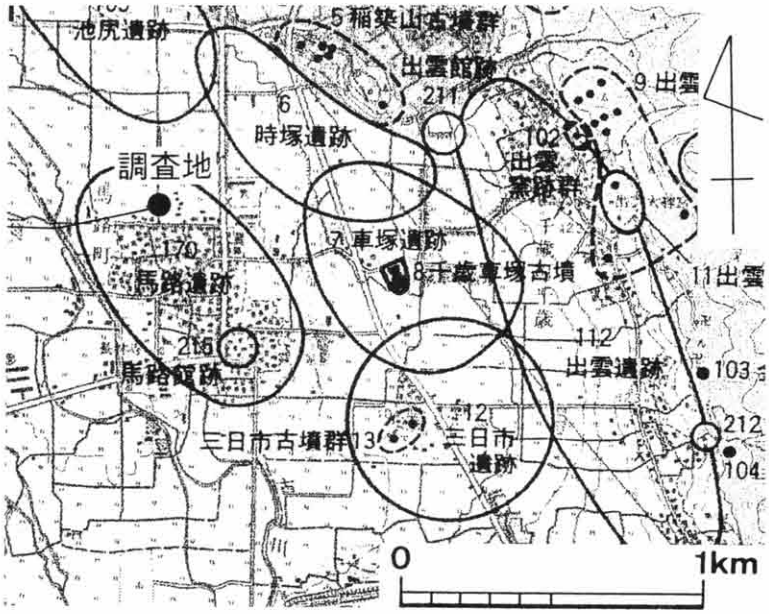
調査面積　約4,400㎡

はじめに　調査は、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて実施した。馬路遺跡は桂川左岸の低位段丘上に立地し、現在の馬路町の集落を中心として広がる集落遺跡で、その範囲は東西約750m、南北約750mを測る。周辺には、千歳車塚古墳や時塚遺跡・三日市遺跡・池尻遺跡などの遺跡が隣接して所在する(第１図)。

今年度の調査は、京都府教育委員会が馬路町集落の北側に広がる田畑部で試掘調査を行い、その成果をもとに、当調査研究センターが遺構・遺物が密に広がる４地区において面的調査を実施した。各調査地区で検出した遺構の概要は以下の通りである。

Ａ地区　竪穴式住居跡６基・掘立柱建物跡４棟・溝・ピットなどを検出した。遺構の切り合い関係、弥生～平安時代の遺物の出土などから、各時期の遺構が多数存在することが判明した。竪穴式住居跡は大きいもので、一辺5.3mを測る。出土遺物から飛鳥時代に属すると考えられる。掘立柱建物跡は、柱筋を揃えて南北方向(N15°W)に３棟建てられている。

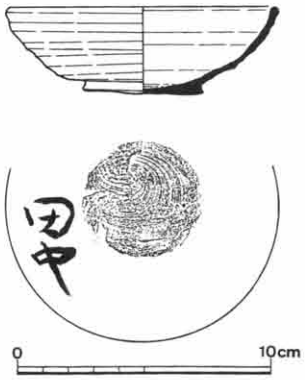
Ｂ地区　溝３条・土坑４基・ピットなどを検出した。南北方向の溝ＳＤ02は、幅約0.6m、深さ約0.8mを測る。東西方向の溝ＳＤ03は、幅約0.6m、深さ約0.8mを測り、溝の底で弥生時代中期の甕が出土した。土坑ＳＫ04・05・06から、横に据えた状態の弥生甕が出土した。また、溝ＳＤ02と溝ＳＤ03がつながることや周辺の弥生時代の土坑の検出状況から、調査地は方形周溝墓を中心とした墓域であった可能性も考えられる。



第１図　調査地および周辺遺跡分布図
(1/25,000『新修亀岡市史資料編』付図より転載・加筆)

Ｃ地区　竪穴式住居跡２基・掘立柱建物跡１棟・溝４条・ピットなどを検出した。溝ＳＤ01は、南北方向の溝であるが、北西隅で「Ｌ」字状に屈曲し、西流する。幅約1.1m、深さ約0.3mを測り、屈曲部から緑釉陶器と、外面に「田中」と墨で書かれた須恵器

が出土した(第２図)。出土遺物から平安時代の遺物と思われる。溝ＳＤ02は、出土遺物から、古墳時代の遺構と思われる。溝ＳＤ04は、幅約1.7m、深さ約0.8mを測る溝で、部分的に溝ＳＤ02と重なっている。奈良～平安時代の遺物が出土しているため、後世に溝が改修されたと考えられる。竪穴式住居跡ＳＨ03は、東西5.5m、南北5.8m、深さ0.1mを測る。飛鳥時代に属するものと考えられる。竪穴式住居跡ＳＨ05も同方向を向くことから、同時期であると考えられる。掘立柱建物跡ＳＢ19は、２間(4.4m)×３間(6.6m)の規模で、棟方向はおよそ真北を向く。出土遺物がなく、時期については不明である。



第２図　Ｃ地区溝ＳＤ01出土墨書土器「田中」実測図

Ｄ地区　竪穴式住居跡３基・焼土坑７基・土坑４基・溝３条などを検出した。竪穴式住居跡にはそれぞれ竈が設けられ、飛鳥時代に属する。溝ＳＤ01は出土した遺物から、中世に埋没したと思われる。焼土坑は、平面形が方形と不定形なものがあり、炭化物の混入や厚い赤色の焼土がみられる。遺構の切り合い関係と出土遺物から、鎌倉時代以降の遺構と考えられる。

まとめ　今回の調査では、Ａ・Ｂ地区は弥生～平安時代の遺構、Ｃ地区は飛鳥～平安時代の遺構、Ｄ地区では飛鳥時代～中世にかけての遺構を検出した。弥生時代の遺構は東側に集中し、飛鳥～平安時代や中世の遺構は、調査地全域に広がっていることを確認した。

しかしながら、今回の調査で検出した遺構は、いずれも残りが悪く、Ａ地区の遺構密度に比べて、Ｃ・Ｄ地区は希薄である。段丘の先端付近であるＣ・Ｄ地区は、後世の削平によって住居跡などの遺構が消滅した可能性も考えられる。

Ａ地区で検出した掘立柱建物跡は、規模が２間×２間が２棟と、２間×４間が１棟あり、柱筋を揃えて南北方向に建てられている。総柱の建物が並ぶ倉庫的な建物が想像できる。Ｂ地区では、方形周溝墓と思われる遺構などが確認できた。Ｃ地区では古墳時代の遺構も検出し、Ｄ地区においては中世の遺構と思われる焼土坑を集中して検出した。これらのことから、馬路遺跡は、弥生時代～中世にかけての複合遺跡であると考えられる。

また、Ａ地区の溝ＳＤ501・502や竪穴式住居跡・掘立柱建物跡、Ｃ地区の溝ＳＤ02・04や竪穴式住居跡の主軸方位がおよそN30°Wを向くことは、当時の道路や地割りの影響を受けた可能性も考えられ、今後、検討が必要であろう。

この地域一帯には、千歳車塚古墳や方墳を検出した時塚遺跡、丹波国分寺跡・国分尼寺跡、河原尻遺跡や大淵遺跡などの集落遺跡、三日市遺跡で確認した瓦窯関連の遺構などの古墳～平安時代にかけての遺跡が集中することも興味深く、今後のこの地域での調査成果が期待される。

(村田和弘)

19. 三日市（みっかいち）遺跡第３次

所 在 地　亀岡市馬路町字諸山

調査期間　平成15年11月10日～平成16年２月20日

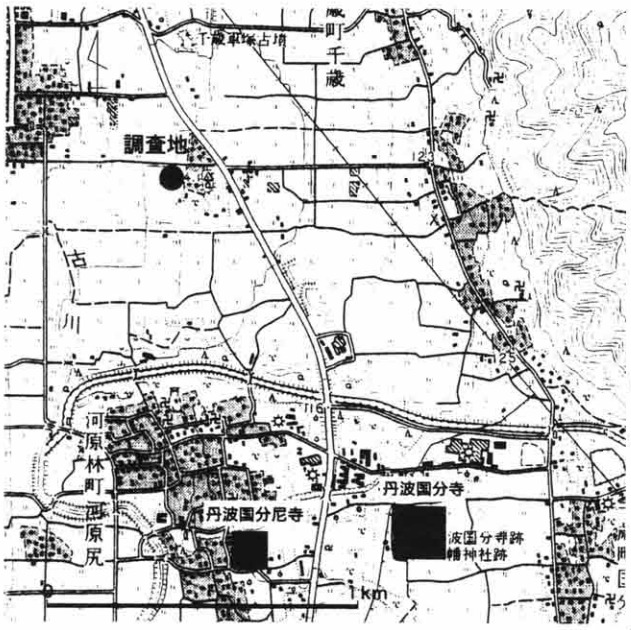
調査面積　約3,000m²

はじめに　三日市遺跡は、保津川東岸に位置する低位段丘を中心に、縄文時代から中世にかけての遺物が散布することが知られていた。京都府教育委員会の試掘調査により瓦の出土が確認されたが、その実態を明らかにするには至らなかった。今回、この試掘調査の成果を受け、遺跡の実態を把握するための調査を面的に実施することとなった。

なお、今回の調査は国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の委託を受けて実施したものである。

調査概要　今回の調査では、段丘下部の水田を対象にトレンチを設定した。その結果、この地点には幅約20mの自然流路が存在したことが判明した。この流路は、縄文時代晩期頃には形成され、徐々に埋没していったとみられる。流路内から多量の瓦が出土した。瓦は流路の東岸に密集していた(第２図網目部分)。

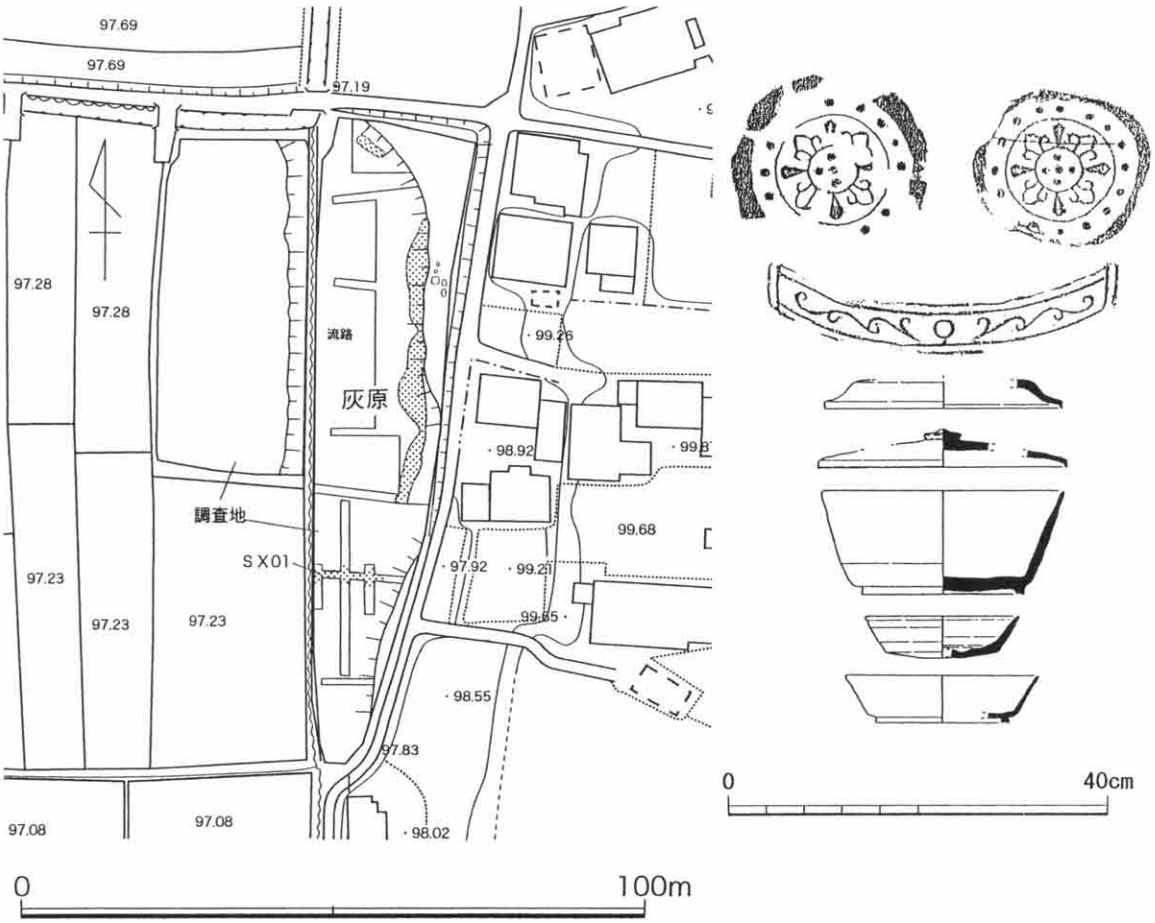
出土瓦には、平瓦・丸瓦・軒平瓦・軒丸瓦・塼・道具瓦の各種が認められ、その大部分は破損・変形・溶着していた。瓦窯の壁体が同時に出土していることから考えて、瓦の密集する部分は瓦窯に伴う灰原と判断される。特に瓦の密集する部分の東には焼土面が２か所認められ、瓦窯前面の土坑などの残欠とみられる。以上の状況から調査区の東側近接地に斜面を利用して瓦窯が築かれていると判断される。出土した壁体の中には瓦とスサ入り粘土を交互に固めたものがみられるため、瓦窯本体は、瓦積みの平窯であると推測される。



第１図　調査地位置図(国土地理院1/25,000亀岡)

また、南側で部分的に調査を実施した地点では残存率の高い瓦片が列状に並べられ、杭により固定されている遺構(ＳＸ01)を確認した。この遺構の性格については明確にし難いが、規模・時期こそ異なるものの、構造的に類似するものとして、長崎県壱岐原ノ辻遺跡の船着き場とされる遺構があり、このＳＸ01も小規模ながら船着き場である可能性がある。

瓦集中部分から出土した瓦は、軒平瓦・軒丸瓦の模様から丹波国分寺に供給された



第２図　調査地全体図および出土遺物実測図

ものであることが判明した。また、出土した軒丸瓦は瓦当に笵傷が認められ、創建時に使用された瓦より若干後出するものと思われる。共伴する須恵器の年代観は、奈良時代中葉～後半のものが主体である。また、須恵器には「富福」と書かれた墨書土器が存在する点が注目される。

性格不明遺構ＳＸ01に使用された瓦の中には、創建時のものである笵傷のない一本作りの軒丸瓦が認められ、丹波国分寺創建時の瓦を焼成した瓦窯も近接地にあるものと考えられる。

まとめ

(1)丹波国分寺の瓦を焼成した瓦窯に伴う灰原の存在を明らかにすることができた。今後、周辺部の調査により、瓦窯本体や工房などが確認されるものと考えられる。

(2)全国で62か所存在する国分寺の内、瓦窯の判明している国分寺は、畿内中心部を除いて10か所足らずであり、国分寺にどのように瓦を供給したのか、実態が充分に把握されているわけではない。今後、三日市遺跡の調査・研究が進展することによって、国分寺造営に伴い操業された瓦窯の実態が解明されるものと期待される。

（石崎善久）

20. 時塚（ときづか）遺跡第６次

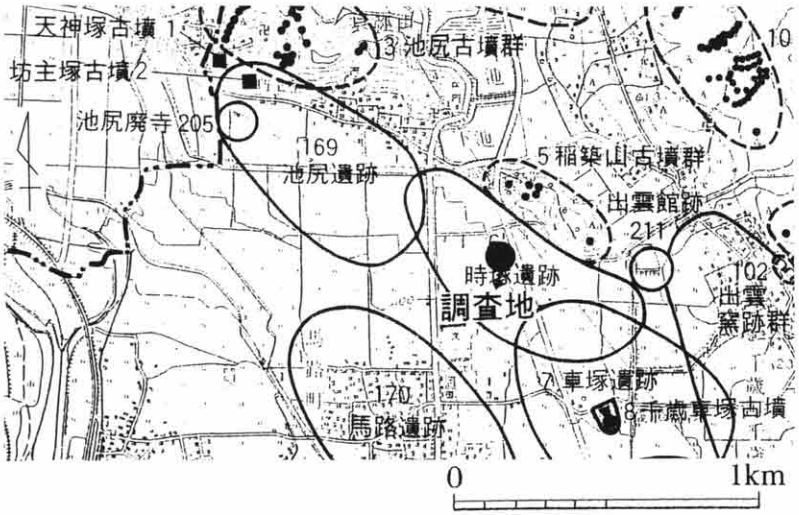
所 在 地　亀岡市馬路町時塚

調査期間　平成16年２月９日～２月20日

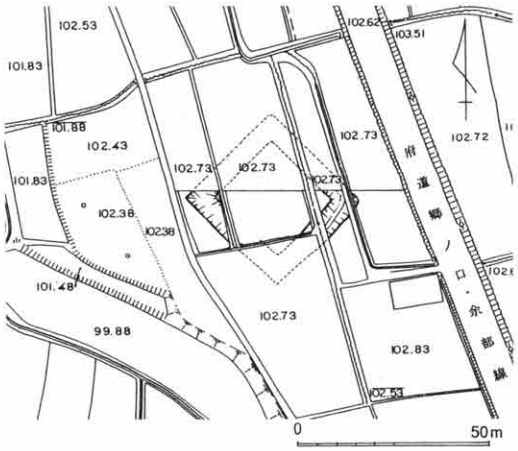
調査面積　約1,300m²

はじめに　時塚遺跡第６次の発掘調査は、国営農地再編整備事業「亀岡地区」に伴い、農林水産省近畿農政局の委託を受けて実施した事前調査である。京都府教育委員会が実施した試掘調査地では、古墳の周溝の東隅部を検出しており、規模は判然としないものの方墳の存在が確認された。今回の調査地は、古墳の西隣接部とその一帯にあたり、同一古墳の周溝をはじめ、古墳築造以前の遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要　今回の調査では、方墳の南東辺の周溝の一部と南西辺および西隅部分を検出した。京都府教育委員会の試掘調査成果などから、溝の最深部で計測すれば一辺約30mの方墳として復原し得る。遺構の掘削作業を実施していないため、時期や溝の形状など不明な点が多いが、周溝の検出面からは、奈良時代の土器片がわずかに出土するとともに、本来、副葬品であったと思しき鉄器などが出土している。一方、墳丘および周溝外側の地山面では、竪穴式住居跡や土坑、柱穴などを検出しており、弥生時代後半期の土器が出土していることから、同時期の集落の存在もあわせて確認することができた。



第１図　調査地位置図（新修亀岡市史、付図「亀岡市の遺跡地図」1/25,000を転載、加筆）



第２図　検出方墳復原図

まとめ　今回の発掘調査では、古墳時代中期後半に比定できる一辺約30mを測る方墳を検出した。当該地は、「ときづか」の地名があり、検出古墳との関係が予想される。また、千歳車塚古墳や坊主塚古墳などとの歴史的な関係についても考えてゆく必要がある。

（小池　寛）

21. 案察使遺跡第５次

所 在 地　亀岡市保津町出井

調査期間　平成16年１月16日～２月24日

調査面積　約350㎡

はじめに　今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により、平成15年度主要地方道路亀岡園部線緊急地方道路整備事業に先立つ試掘調査として実施した。

案察使遺跡は、亀岡盆地を貫いて流れる桂川の東岸に立地する集落遺跡である。平成14年度の調査では、多くの土坑が検出され、その内部からは、弥生時代末の土器が出土している。

調査概要　調査対象地は丘陵の縁に沿って湾曲しており、段丘崖と考えられる比高差が認められる。試掘調査として、段丘崖の下の部分に３か所、上に１か所の調査トレンチを設けた。南端から第１～４トレンチと名付けた。

第１トレンチは、平成14年度の調査区に隣接する。その調査と同じく黒色の粘質土が堆積し、弥生時代末の土坑が検出できた。内部からは庄内期の甕や、木製品が出土している。

第２トレンチは、段丘上に設けたトレンチで、調査区隅で遺構が検出できた。遺構の多くの部分が調査区外となるため遺構の性格は特定できないが、内部から、石庖丁の入った弥生時代中期の壺が完全な形で出土した。

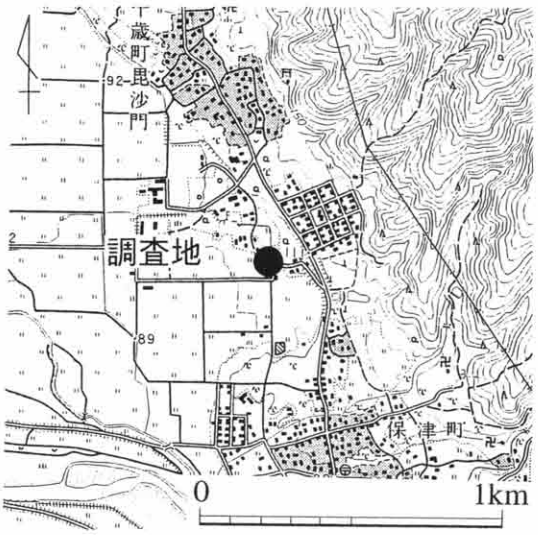
第３トレンチは、段丘の下に設けたトレンチである。広域火山灰であるアカホヤ火山灰層を検出した。埋設管があったため、下層の十分な調査は実施できなかった。

第４トレンチは、段丘の下に設けたトレンチである。上面での遺構検出はできなかったが、下層で広域火山灰であるアカホヤ火山灰層を検出した。アカホヤ火山灰層の下には黒色の粘質土があり、有機物とともに縄文時代早期の土器が出土した。

まとめ　今回の試掘調査によって調査対象地内では、縄文時代早期、弥生時代中期、弥生時代末の３時期の遺構・遺物が確認できた。特に縄文早期の土器は、ネガティブタイプの押型紋土器で亀岡盆地でも最も古い土器として位置づけられる。

また、アカホヤ火山灰下層の有機物を含む層は多くの自然環境に関する情報を持っているものと考えられる。

（中川和哉）



調査地位置図（国土地理院1/25,000亀岡）

22. 長岡京跡右京第781次・神足遺跡

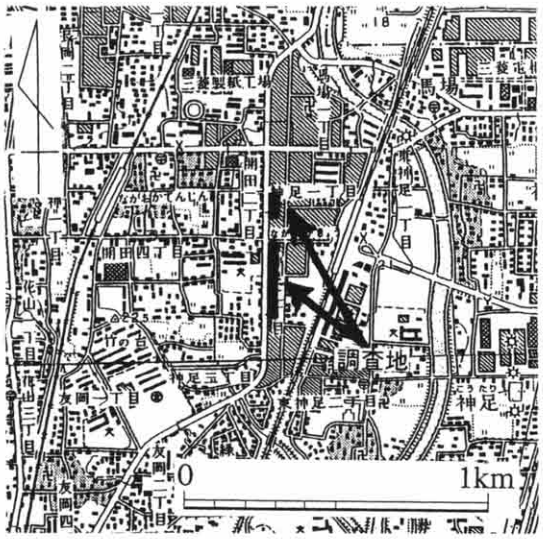
所 在 地　長岡京市開田二丁目・神足二丁目地内

調査期間　平成15年７月９日～平成16年１月29日

調査面積　約1,450㎡

はじめに　この調査は、府道御陵山崎線(府道西京高槻線)の拡張事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施したものである。調査地は、小畑川右岸に形成された低位段丘上に立地する。周辺の地勢は、北西→南東へとゆるやかに傾斜し、地山面の標高は18.5～16.1mである。長岡京の条坊復原推定によると、右京六条一坊十五・十六町(新条坊では、同六条一坊十三・十四町)、右京五条十三町(新条坊では、同六条一坊十五町)に相当する。

調査概要　道路拡幅予定地内に12か所の調査区を設定して発掘調査を実施した。その結果、右京五条十三町域では、長岡京期の掘立柱建物跡２棟・井戸２基、近世の東西方向の側溝３条など、同六条一坊十五・十六町域では、長岡京期の掘立柱建物跡１棟・土坑・南北および東西溝、平安時代前期の土坑、中世の掘立柱建物跡・土坑・大小の溝、近世の側溝などを検出した。長岡京期の掘立柱建物跡は、南北２間以上×東西２間の南北棟と、南北２間×東西２間以上の東西棟および西側に庇を付した東西棟(規模不明)の各１棟で、前２者の柱間は2.4m(８尺)を測る。井戸は２基ともに平面隅丸方形であるが、一辺2.4mと同２mと長さに差違がある。木製井戸枠はすべて再利用されたようで残存せず、埋土から長岡宮式7731Ａ型式の均整唐草文軒平瓦１点を含む長岡京期の遺物が多量に出土した。土坑からは墨書土器も確認された。また、鎌倉時代に掘削された幅３m、深さ１～1.2mの断面「U」字形の大溝は、南北方向に５トレンチにわたって検出し、最南端調査区の東隣接地で直角に折れて西方にのびていた。昨年度調査分を加算すると、南北長130mとなる。中世の建物跡は３間四方の総柱建物である。近世の東西溝は水田・畑地の区画溝と想定できる。



調査地位置図
(国土地理院1/25,000京都西南部・淀)

まとめ　隣接地に古墳の存在を示す蓋形埴輪や、左京北一条三坊二町(東院跡)専用軒平瓦の出土は、この地が当該期に歴史的に重要な地域であったことを意味している。六条大路の北側を区画する東西方向の宅地区画溝の確認は、条坊確定に役立つであろう。また、鎌倉時代の大溝はおそらくは居館に伴う溝であり、近隣の開田城に先立つ中世時での豪族の居住地を調査地の西南側に想定して大過なかろう。

(松井忠春)

23. 長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡

所 在 地　長岡京市井ノ内小西

調査期間　平成15年11月26日～平成16年２月26日

調査面積　約800m²

はじめに　この調査は、主要地方道大山崎大枝線緊急地方道整備事業に伴い、京都府土木建築部の依頼を受け実施したものである。調査地は、小畑川右岸の善峰川により形成された沖積地の南側の低位段丘上に位置する。長岡京の条坊復原推定によると、右京二条四坊二町(新条坊では、右京二条四坊四町)にあたる。

調査概要　古墳時代の遺構としては、掘立柱建物跡１棟、溝１条がある。掘立柱建物跡は北西から南東に主軸をもつ２間×３間の建物跡である。溝は南西から北東にやや蛇行しながらのびるもので、中央部分を中世の土坑に削平されている。いずれも、古墳時代後期のものである。

平安時代の遺構には、土坑１基、柱穴がある。土坑内からは、10世紀後半に比定される黒色土器椀を中心に土師器皿など土器類のみが出土した。完全に復原できないものもあり、廃棄土坑であった可能性がある。柱穴内からは９世紀前半に比定される土師器杯が出土し、底部外面中央には漢字で「長」と一字墨書されていた。そのほかには、遺物がほとんど出土せず時期を特定できないが、掘立柱建物跡３棟、溝１条、井戸１基がある。掘立柱建物跡は、主軸を南北にもつもの(２間×３間)と、東西にもつ(２間×２間と２間×３間以上に復原されるもの)建物跡である。周辺からは、12世紀前半～13世紀にかけての遺物が出土している。溝は、北北東－南南西方向にのびる。埋土からは古墳時代の遺物も出土しているが、平安時代後期の溝と考えられる。

まとめ　長岡京期の遺物は少量出土したが、顕著な遺構は認められなかった。平安時代後期の溝内からは、須恵器器台・高杯・提瓶などの出土も認められ、周辺に古墳が存在していた可能性がある。出土遺物に磨滅・細片化したものが認められることから、遺構は、平安時代以降の土地利用に伴い削平された可能性も考えられる。平成15年度に、北側約85mのところで実施した調査では、中世居館の外郭施設と考えられる方形に区画された溝の北・東限の一部を確認していたが、今回の調査地内ではその南限の溝は確認されなかった。また、調査で検出された建物はこの区画外に建つものであり、その関連性については今後検討していきたい。

(増田孝彦)

調査地位置図(国土地理院1/25,000京都西南部)

24. 長岡京跡右京第799次

所 在 地　長岡京市友岡川原・下海印寺岸ノ下

調査期間　平成15年12月１日～平成16年２月26日

調査面積　約1,560㎡

はじめに　今回の調査は、京都第二外環状道路建設に先立ち、国土交通省の依頼を受けて実施したもので、調査地は、長岡京右京七条三坊十二町・八条三坊九町(新呼称では八条三坊十・十一町)に位置する。調査対象地の西側には小泉川が隣接して流れているため、遺構・遺物の有無とその性格を明らかにするために、試掘調査を行った。

調査概要　試掘調査は、まず、友岡地区に６本のトレンチを設定して調査を実施した。すべてのトレンチで、小泉川の流路内堆積の砂礫層をベースにして、中世以降、現代に至る田畑の耕作土とその整地土を確認するにとどまった。

下海印寺地区は友岡地区の北側に位置し、13か所のトレンチを設定した。試掘調査の結果を総合すると、道路建設予定地内の西側は小泉川の旧流路・氾濫原にあたっており、砂礫層をベースにして、中世以降の田畑耕作土とその整地土が広がっているだけである。それに対して、東側の一段高い段丘上では、縄文～平安時代の遺物とともに、柱穴・土坑・溝などの遺構を検出し、遺構・遺物が広範囲に遺存していることが判明した。縄文土器は包含層からの出土で、小片であるが、中期のものと判断される。検出した遺構は完掘していないのでその埋没時期は特定できていないが、瓦が廃棄された溝が注目される。この溝は、幅３ｍ、深さ40cmで、Ｎ６°Ｗの傾きを有して東西方向に掘られている。瓦片は北側から投棄された状態で集積しており、奈良～平安時代に埋没したものと推測され、この溝の北側に瓦を葺いた構造物が造られていたと推定される。

まとめ　今回の試掘調査により、現小泉川に近接した範囲は、旧小泉川の流路にあたっており、顕著な遺構・遺物は確認できなかった。それに対して、下海印寺地区の段丘上では顕著な遺構・遺物を確認した。包含層からは縄文土器および石器・石器剥片が出土しており、縄文時代の遺構面が遺存している可能性が高い。南東側約300ｍに位置する右京第325次では、縄文時代中期を主体とする多量の縄文土器が検出されており、それとの関連が注目される。また、多数の瓦片が廃棄されていた東西方向の溝は、長岡京跡の条坊遺構や周辺に存在したと想定されている伊賀寺跡との関連が注目される。

（岩松　保）

調査地位置図(国土地理院1/25,000淀)

25. 薪（たきぎ）遺跡第５次

所 在 地　京田辺市大字薪小字狭道・巽

調査期間　平成16年１月９日～２月26日

調査面積　約350㎡

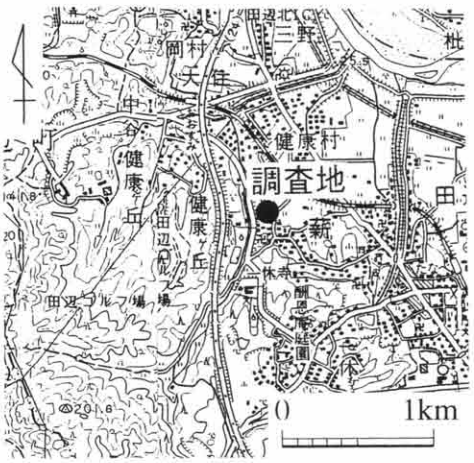
はじめに　薪遺跡は、山城盆地の南部を流れる木津川左岸丘陵の裾部に位置し、縄文時代から近世におよぶ複合集落遺跡として知られる。今回の調査は、主要地方道八幡木津線道路整備促進事業に伴う発掘調査であり、計画路線帯内の遺構の状況の把握、遺跡範囲の確認などを主目的とし、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。

調査概要　過去２回にわたる試掘調査を遺跡の南東部と中央部で行ったため、今回は、特に北西部を対象とした。遺跡の北西部において第１～４トレンチの４調査区を設定し、中央部に第５トレンチを、さらに南部に第６トレンチを設定した。

第１トレンチでは、周辺が低湿地であり、表土下約30cmで激しい湧水がみられた。排水を行いつつ、さらに下層調査を行ったが、明確な遺構は認められなかった。第２トレンチでは、表土下約１ｍまで掘削し旧河道の一部とみられる砂礫層を検出したが、やはり遺構は認められなかった。第３トレンチでは、南北方向の素掘り溝を検出した。包含層中から、中世の土器片が出土しており、中世段階の素掘り溝となる可能性がある。また、一部を表土下約２ｍまで掘削し、礫層を検出したが、湧水のため、下層の掘削は断念した。第４トレンチでは、東西方向に10～11条、南北方向に２条の素掘り溝を検出した。包含層中から染付け片が出土し、近世以降の素堀り溝と推定される。第５トレンチでは、表土下約1.5ｍで、南北方向の２条の素堀り溝、土坑２基、東西方向の溝１条などを検出した。東西方向の溝からは、奈良時代の須恵器が出土し、排水溝内から埴輪が出土した。また、表土下約1.4ｍのレベルにおいて、縄文時代後期の遺物包含層を検出している。第６トレンチでは、土坑４基を検出したが、遺物は出土せず、時期は不明である。

まとめ　第１～４トレンチでは、主に素堀り溝などを検出したが、ほかに顕著な遺構は認められなかった。周辺一帯は手原川の氾濫原となり、遺構の多くは流失したと推定される。第５トレンチでは、これまでの試掘でも確認されていた奈良時代と縄文時代の遺物のほか、古墳時代中期初頭頃の埴輪が出土した。こうしたことから周辺に当該期の古墳が存在する可能性が高いと言えよう。

（高野陽子）



調査地位置図
（国土地理院1/50,000大阪東北部）

26. 西ノ口（にしのくち）遺跡

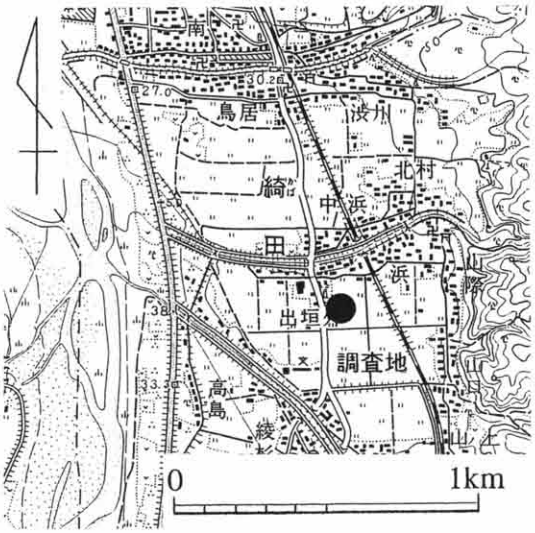
所 在 地　相楽郡山城町大字綺田小字西ノ口

調査期間　平成16年１月６日～２月17日

調査面積　約500㎡

はじめに　西ノ口遺跡は木津川の東岸の沖積地に位置し、土師器・須恵器などの遺物散布地として知られている。調査は、府道上狛城陽線の道路改良工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。天神川と不動川の天井川で囲まれたこの地区は、昭和28年８月14・15日の集中豪雨および同年９月25日の台風13号で、河川の堤防が決壊し、田畑に土砂が流入する被害や、調査地東側に位置する山裾の集落では、山崩れによる土石流により家屋倒壊などの被害が発生している。

調査概要　府道上狛城陽線に平行して水田部分に幅約４ｍ、長さ107ｍにわたってトレンチを設定した。現水田面の標高は約25.5ｍで、深さ約２ｍの中世面まで重機で掘削した。一部深掘りを行い、地表下約４ｍで古墳時代の遺物をわずかに含む黄白色細砂層に到達し湧水をみた。水田耕作土の床土から下には、前述の水害の洪水砂とみられる暗茶灰色粘粗砂層を介して暗灰色粘砂質土が堆積する。この暗灰色粘砂質土は湿地状の堆積層で、弥生時代後期から江戸時代にかけての遺物が出土した。この層の上層には杭が打ち込まれており、近世の段階では湿地ないしは池の護岸施設であったと考えられる。このほか東西方向の流路跡を２か所で確認した。また、調査地の壁面の観察によって調査地の南側で地震による液状化現象（噴砂）を確認した。しかし、昭和28年の水害による洪水層は北半部でみられたものの、調査地南部までは及んでいなかった。調査の最終段階で一辺１×１ｍ、深さ約１ｍのグリッド掘りを15か所で行ったが、この深さでは遺構は確認できず、各グリッドからわずかに遺物の出土をみたのみであった。下層の堆積状況は基本的に砂と粘土混じり砂質土との互層となっていた。



調査地位置図（国土地理院1/25,000田辺）

まとめ　調査によって、南側が高く、北側に傾斜する旧地形が確認できた。地盤を構成する砂層は、地質の専門家の現地でのご教示により木津川本流からの流入物であることが確認できた。

今回の調査では、包含層から弥生時代後期から江戸時代にかけての遺物が出土したが、顕著な遺構は確認できなかった。出土した遺物はあまり磨滅しておらず、遺物の残存状況からみて付近に遺構の存在する可能性がある。

（柴　暁彦）

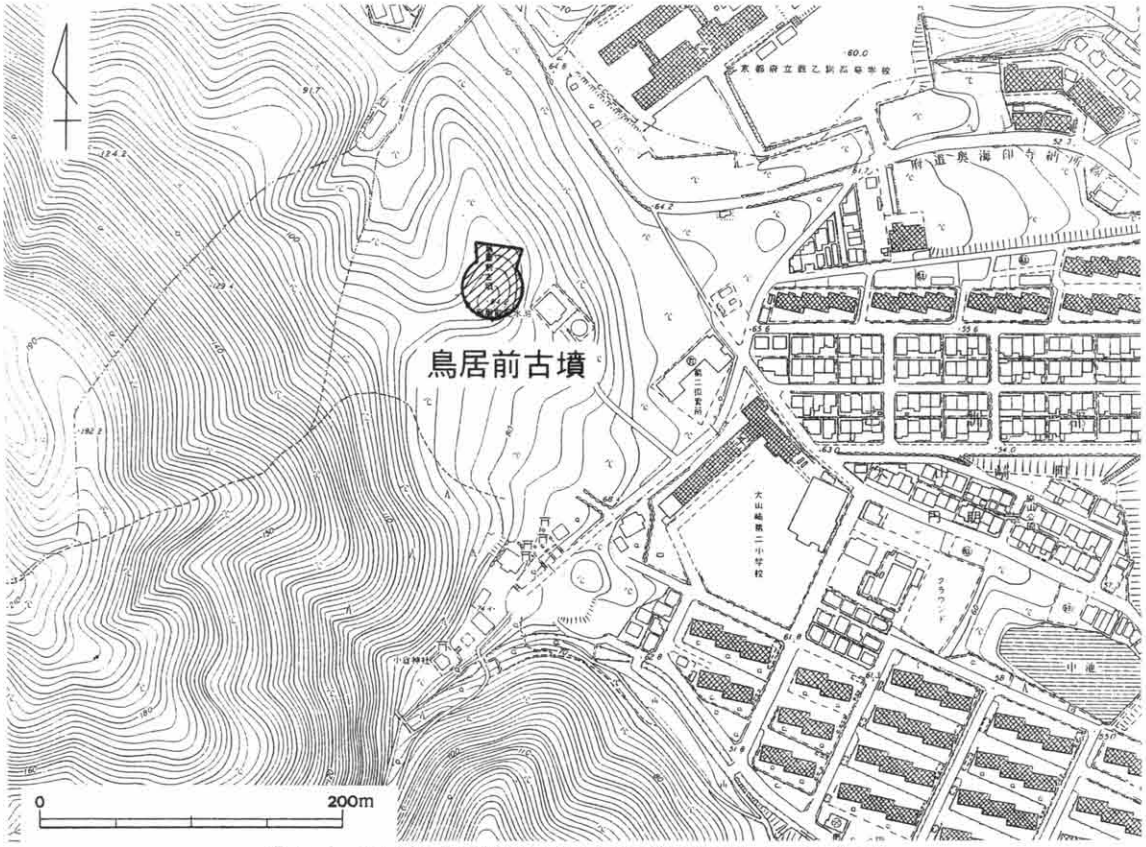
府内遺跡紹介

98. 鳥居前古墳（とりいまえ）

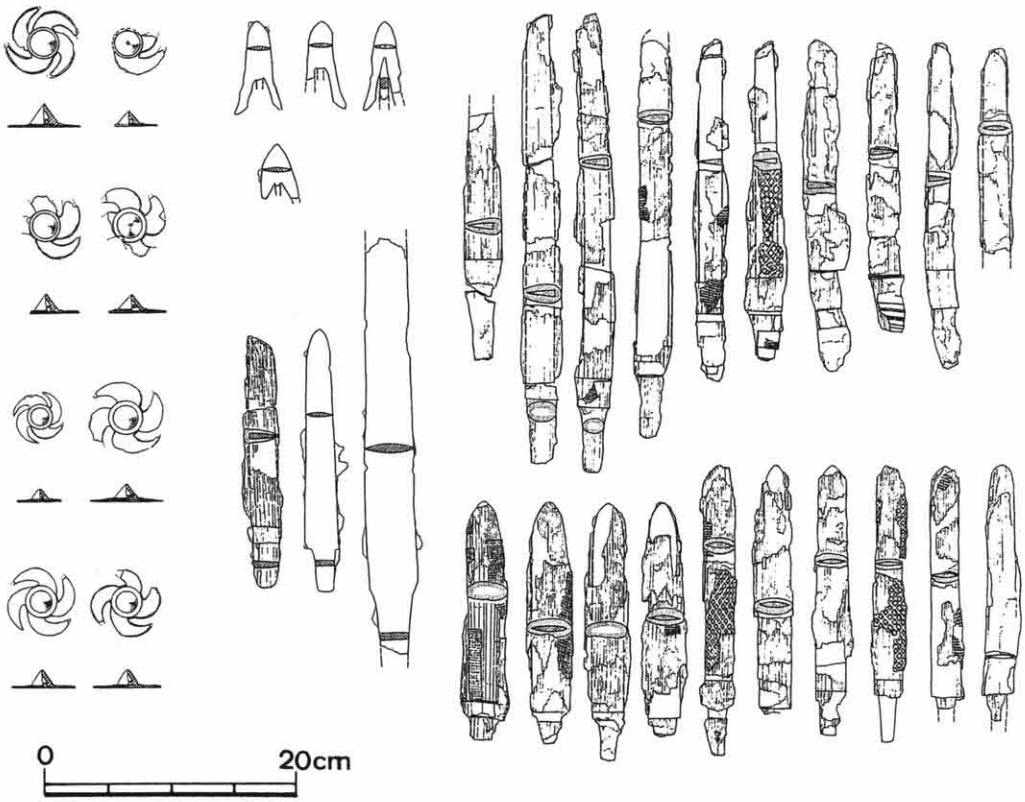
今回紹介する鳥居前古墳は、長岡京市との境に近い大山崎町内にある。大山崎町は桂川、宇治川、木津川の三川が合流する狭隘部の北側にある人口1.5万人の町で、陸上、水上の交通の要衝とされる。そのため古代から山崎津、山崎駅が設置されていた。このような街道や河川を望む標高99mの丘陵上に古墳は位置している。

この古墳の東約1.8kmの平野部には、盾形周溝をもつ全長120mの前方後円墳恵解山古墳が造られている。遺跡の近くには、横穴式石室をもつ西明寺古墳や、延喜式に記述の見られる小倉神社があり、乙訓名物の筍を生産する竹林が広がる。近年は都市化のためその量は減少している。

鳥居前古墳は1967年の京都府教育委員会の分布調査によって発見された古墳である。墳丘は竹林の土入れによって地形が改変され、墳丘の規模・形状は地表観察では確認できなかった。しかし、埴輪や葺石、石室の石材などが散乱していたため、大型の古墳が存在していることが期待された。1969年に、古墳の性格を把握することと、文化財の保護を目的に第１次調査として京都府教育委員会が発掘調査を実施した。墳丘部の調査では、後円部は三段築成で直径約40m、高さ6.5mの規模と葺石と埴輪をもつことが確認できたが、前方部に関しては長さ30mの規模をもつ



第１図　鳥居前古墳位置図（福永編1990を再トレース改変）



第２図　鳥居前古墳出土遺物

と想定したが、前方部の土地の改変が著しく規模を確定することはできなかった。埋葬主体部は、竪穴式石室で、後円部に墳丘主軸に斜行するように造られていた。棺は割竹形木棺である。出土遺物には、画文帯神獣鏡・巴形銅器・勾玉・管玉・鉄鏃・鉄剣・鉄刀などが出土している。

1986年の第２次調査では、墳形と規模の確認のため大山崎町教育委員の依頼を受け、大阪大学鳥居前古墳調査団が調査を実施した。その結果、前方部は８ｍ程度しか確認できなかった。地形的制約から前部部が短い帆立貝式古墳の可能性が高いとした。また、出土埴輪から、築造時期が古墳時代前期末～中期初頭であることが確認された。

前方部の規模をさらに確認するため、1987年に大阪大学文学部考古学研究室によって第３次調査が実施された。その結果、前方部が二段築成であることが分かった。前方部の規模の確定はできなかったが、旧地形と葺石の検出レベルから、長さ12m前後の規模をもつ古墳であるとされた。

古墳の現状は、前述したように大きく土取りのために変形を受けているが、現地では大型の古墳の立地や式内社小倉神社の散策を楽しむことができる。古墳には、阪急大山崎駅かＪＲ大山崎駅から徒歩、あるいは、ＪＲ長岡京駅、または、阪急長岡京駅から阪急バスに乗車し「第二山崎小学校前」下車徒歩約５分で墳丘近くまでたどり着くことができる。出土遺物の多くは、現在、京都府立山城郷土資料館に展示・収蔵されている。

（中川和哉）

参考文献

杉原和雄　1970「鳥居前古墳発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』　京都府教育委員会
福永伸哉編　1990『鳥居前古墳―総括編―』　大阪大学文学部考古学研究室

長岡京跡調査だより・89

長岡京連絡協議会の平成16年１月28日と２月25日・３月24日の月例会では、宮内１件、左京域４件、右京域18件の調査が報告された。京域外の４件を併せると合計27件となる。

調査地一覧表(2004年３月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第430次	7ANEHJ-10	向日市鶏冠井町祓所41-15・16・45	(財)向日市埋文	12/8～3/5
2	左京第488次・淀城跡	7ANYIM-1	京都市伏見区淀池上町	(財)京都市埋文研	11/13～1/16
3	左京第489次・淀城跡	7ANYIM-2	京都市伏見区淀池上町	(財)京都市埋文研	11/13～1/29
4	向日市立会第03097次	7ANFJK	向日市上植野町浄徳11-26	(財)向日市埋文	1/8
5	向日市立会第03110次	7ANEJS	向日市鶏冠井町十相19	(財)向日市埋文	2/4～2/19
6	右京第778次・境野古墳群第３次	4PSTSN-4	大山崎町下植野境野30・32	大山崎町教委	1/7～3/11
7	右京第781次	7ANKSM-11	長岡京市開田二丁目・神足二丁目地内	(財)京都府埋文	7/9～1/29
8	右京第787次	7ANNNM-5	長岡京市梅ヶ丘一丁目73-５ほか	(財)京都府埋文	10/20～12/19
9	右京第790次・開田城跡第６次	7ANKSC-9	長岡京市天神一丁目313-１・313-４ほか	(財)長岡京市埋文	10/6～2/13
10	右京第795次	7ANGKS-6	長岡京市井ノ内小西	(財)京都府埋文	11/26～2/26
11	右京第796次	7ANMSM-4	長岡京市神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	11/21～1/15
12	右京第797次	7ANMSM-5	長岡京市神足一丁目330	(財)長岡京市埋文	12/1～1/9
13	右京第798次	7ANMSM-6	長岡京市神足一丁目地内	(財)長岡京市埋文	12/2～1/16
14	右京第799次	7ANNKR-1	長岡京市友岡川原９-１	(財)京都府埋文	12/1～2/26
15	右京第800次	7ANMDB-13	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	12/8～1/30
16	右京第801次	7ANGHD-6	長岡京市井ノ内広海道42-２	(財)長岡京市埋文	1/6～3/3
17	右京第802次	7ANGHD-7	長岡京市井ノ内広海道42-２	(財)長岡京市埋文	1/6～3/31
18	右京第803次	7ANJHO-1	長岡京市長法寺平尾１-１	(財)長岡京市埋文	1/15～1/26
19	右京第804次	7ANMDB-14	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	1/22～2/4
20	右京第805次	7ANMDB-15	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	2/3～2/27
21	右京第806次	7ANKTM-9	長岡京市天神二丁目118	(財)長岡京市埋文	2/16～2/23
22	右京第807次	7ANMSM-7	長岡京市神足一丁目229-37	(財)長岡京市埋文	2/20～
23	右京第808次	7ANMDB-16	長岡京市神足二丁目地内	(財)長岡京市埋文	3/1～3/12
24	大山崎町第54次	7YYMS'YM-1	大山崎町字大山崎小字横山３-４	大山崎町教委	1/14～2/13
25	山城国府跡第69次	7XYS'MT-7	大山崎町字大山崎小字西谷２	大山崎町教委	1/26～2/6
26	修理式遺跡第９次	3NSBTD	向日市寺戸町九ノ坪７-１ほか	(財)向日市埋文	1/20～3/19
27	修理式遺跡第10次	3NSBSG	向日市寺戸町九ノ坪７-１ほか	(財)向日市埋文	1/20～3/19

長岡京跡発掘調査抄報

宮域　大極殿前庭部で行われていた宝幢(ほうどう)遺構の確認調査(宮内第430次)では、西側の「玄武」「白虎」坑の調査が進み、その構造や構築過程の詳細な解明、および大極殿との位置関係を明らかにするなどの成果が得られた。

右京域　右京第778次では、境野古墳群第３次調査として古墳の実態確認が実施され、墳丘西縁において、くびれ部の形状を示す原位置を保つ埴輪列を検出するといった大きな成果が得られた。これにより当古墳(境野１号墳と命名)は、古墳時代前期後葉に築造された全長60m級の前方後円墳であることが判明し、乙訓地域の首長墓系譜を理解していく上での新たな資料の追加となった。右京第789・790次では、方形単郭式城郭の名残を地表に残す開田城跡について、広域な調査が実施された。その結果、土塁と堀の詳細な構造や築成過程が解明されるとともに、郭内の施設(井戸や多数の柱穴など)の状況が確認された。さらに、中世前期の多数の柱穴や、長岡京期の条坊側溝(西二坊大路西側溝)・掘立柱建物跡、奈良時代の柱列や土器・瓦包含層、弥生時代の竪穴式住居跡数基といった築城前の遺構も各所で検出された(開田城ノ内遺跡)。井ノ内遺跡と重なる地区では、近接して３件の調査が行われた。このうち、右京第795次では、平安時代後期から中世にかけての柱穴(掘立柱建物跡３棟復原)や溝などが多数検出されたほか、それに先行する「長」墨書土器を含む平安時代前期の土器埋納土坑や古墳時代後期の遺物を包含する溝なども確認された。また、右京第801・802次では、古墳時代後期の竈をもつ竪穴式住居跡数基や棺内に土器が副葬された木棺直葬墓２基などが検出され、当該期にあって居住域と墓域が混在する様相が明らかとなってきた。神足遺跡周辺では多くの調査が行われているが、ＪＲ長岡京駅西口前の右京第807次において、剣身の多くを残す細形ないし中広形銅剣が京都府内ではじめて出土して注目を集めた。弥生時代中期の形態的特徴をもち、身軸を水平に保つ出土状況を示すものの、庄内期の包含層中からの出土で二次的混入の可能性も残す。南西に隣接する右京第796次では、弥生時代の方形周溝墓・木棺墓、長岡京期の土坑・柱列・土器埋納遺構、近世の土坑・溝・掘立柱建物跡などが検出されている。

京域外　長岡京の北縁には、皇宮の遊猟地・菜園などを備えた「北苑」が展開する可能性が指摘されているが、京極からおよそ800m北郊に位置する修理式遺跡では、広域にわたって遺跡範囲確認のための試掘調査が行われた。グリッド調査のため得られた情報は断片的だが、弥生～古墳時代の水田を想起させる遺構、長岡京期の南北方向の直線道路側溝、中世の条里地割に基づく溝群など、この地の土地利用に係る変遷の大筋が判明した。道路遺構は、長岡宮の東を画す東一坊大路の延長線上に位置し、南320mの久々相遺跡で確認されていた同道路がさらに北側へのびる可能性が高まった。このほか、遺存状態の良い縄文時代後～晩期の土器(鉢・注口土器)などが出土するなど、縄文時代の集落の存在を窺わせる資料も得られた。

(伊賀高弘)

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター組織および職員一覧

（平成16年５月１日現在）

理事長

上田　正昭

（京都大学名誉教授・京都府文化財保護審議会会長）

副理事長

中尾　芳治

（恭仁宮跡調査専門委員会委員長）

常務理事

杉原　和雄

理　事

石野　博信

（徳島文理大学教授・香芝市二上山博物館館長）

井上　満郎

（京都産業大学文化学部教授）

都出比呂志

（大阪大学大学院文学研究科教授）

中谷　雅治

（元京都府教育庁指導部理事・文化財保護課長）

高橋　誠一

（関西大学文学部教授）

増田富士雄

（京都大学大学院理学研究科教授）

上原　真人

（京都大学大学院文学研究科教授）

下田　元美

（京都府府民労働部文化芸術室長）

奥野　義正

（京都府教育庁指導部長）

小池　　久

（京都府教育庁指導部文化財保護課長）

監　事

奥田登志男

（京都府出納管理局長）

池田　　博

（京都府教育庁管理部長）

事務局長		杉原	和雄
総務課	課　　長	安田	正人
	総務係長	杉江	昌乃
	主　　任	今村	正寿
	専門調査員	橋本	清一
		（府立山城郷土資料館へ派遣）	
	主　　査	北邑	靖史
	主　　事	鍋田	幸世
調　査	課　　長	森下	衛
第１課	課長補佐	水谷	壽克
	企画係長	水谷	壽克（兼）
	主査調査員	伊賀	高弘
	資料係長	辻本	和美
	主任調査員	田中	彰
調　査	課　　長	長谷川	達
第２課	総括調査員	小山	雅人
	課長補佐	奥村清一郎	
	調査第1係長	小池	寛
	主任調査員	引原	茂治　森島　康雄
	専門調査員	岡崎	研一　黒坪　一樹
	調査員	石崎	善久　村田　和弘
		福島	孝行
	調査第2係長	奥村清一郎（兼）	
	次席総括調査員	伊野	近富
	主任調査員	松井	忠春　戸原　和人
		田代	弘　中川　和哉
	専門調査員	石尾	政信
	調査員	筒井	崇史
	調査第3係長	石井	清司
	主任調査員	竹原	一彦　増田　孝彦
		岩松	保
	専門調査員	竹井	治雄
	調査員	柴	暁彦　高野　陽子

センターの動向(04.02～04)

1．できごと

2．4　人権問題研修(於：京都府職員研修所)伊野近富調査第2係長出席

10　上原真人・杉原和雄理事、三日市遺跡現地指導

12　教育関係法人職員合同研修会(於：京都府庁西別館)中谷雅治事務局長、久保哲正調査第1課長、水谷壽克調査第1課課長補佐、伊野近富調査第2係長、竹原一彦・細川康晴主任調査員、鍋田幸世主事出席

13　三日市遺跡第3次(亀岡市)現地説明会

馬路遺跡第3次(亀岡市)現地説明会

片山遺跡第2次(木津町)関係者説明会

17　岡ノ遺跡第2次(福知山市)関係者説明会

西ノ口遺跡(山城町)発掘調査終了(1．6～)

18　長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡(長岡京市)関係者説明会

20　人権問題研修(於：京都府職員研修所)高野陽子調査員出席

岡ノ遺跡第2次、発掘調査終了(7.29～)

馬路遺跡第3次、発掘調査終了(10.29～)

三日市遺跡第3・4次、発掘調査終了(11.10～)

時塚遺跡第6次(亀岡市)発掘調査終了(1.26～)

内里八丁遺跡第20次(八幡市)現地説明会

24　片山遺跡第2次、発掘調査終了(7.23～)

案察使遺跡第5次(亀岡市)発掘調査終了(1.16～)

25　園部城跡第5次(園部町)発掘調査終了(1.21～)

長岡京連絡協議会(於：当センター)

26　人権問題研修(於：京都府職員研修所)戸原和人主任調査員出席

内里八丁遺跡第20次、発掘調査終了(4.24～)

長岡京跡右京第795次・井ノ内遺跡、発掘調査終了(11.26～)

長岡京跡右京第799次(長岡京市)発掘調査終了(12．1～)

薪遺跡第5次(京田辺市)発掘調査終了(1．9～)

27　職員研修(於：当センター)講師：京都工場保健会荒堀典子氏「職場健康づくり実践活動」

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック会議(於：向日市文化資料館)中谷雅治常務理事・事務局長出席

全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議(於：メセナひらかた)久保哲正調査第1課長、小山雅人調査第2課総括調査員出席

3．1　出土文化財整理・台帳作成事業終了(11.25～)

2　人権問題研修(於：向日町地方振興局)小山雅人調査第2課総括調査員、松井忠春・中川和哉主任調査員、竹井治雄・石尾政信・黒坪一樹専門調査員、柴暁彦・野島永・筒井崇史調査員出席

5　全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロックＯＡ委員会(於：京都府京都文化博物館)久保哲正調査第1課長、辻本和美資料係長出席

10　人権問題研修(於：向日町地方振興局)辻本和美資料係長、引原茂治・増田孝彦・田中彰・岩松保・田代弘・森島康雄主任調査員、伊賀高弘主査調査員、関浩治主査出席

24　長岡京連絡協議会(於：向日市文化資料館)

29　第70回役員会・理事会(於：ルビノ京都堀川)上田正昭理事長、中谷雅治常務理事・事務局長、井上満郎、都出比呂志、高橋誠一、増田富士雄、石野博信、杉原和雄各理事出席

31　退職職員辞令交付(別掲)

4．1　常務理事・事務局長就任(別掲)
昇任・異動職員辞令交付

19　上人ヶ平遺跡(木津町)発掘調査開始

20　木津川河床遺跡(八幡市)発掘調査開始

22　門戸古墳群(舞鶴市)発掘調査開始

23　時塚遺跡第7次(亀岡市)発掘調査開始

27　長岡京連絡協議会(於：当センター)

30　退職職員辞令交付(別掲)

2．普及啓発事業

2．21　第98回埋蔵文化財セミナー（於：京都社会福祉会館)『聖武天皇と大仏開眼』：内田真雄井手町教育委員会調査員「石橋瓦窯跡の調査」、森正京都府教育委員会主任「恭仁宮跡の調査」、畑中英二滋賀県文化財保護協会主任調査員「鍛冶屋敷遺跡の大規模鋳造工房」）

(別掲)人事異動

3．31　中谷雅治常務理事・事務局長退職
野島永調査員退職

4．1　杉原和雄常務理事・事務局長就任

30　久保哲正調査第1課長、関浩治主査、細川康晴主任調査員退職(京都府教育庁へ復職)

お詫びと訂正

情報第91号の「略報」に掲載しました、池上遺跡第17次の調査次数は、第18次の誤りです。お詫びし訂正します。

編集後記

新年度をむかえ、当センターも新たな体制でスタートすることになりました。埋文情報誌は、本年度も年４号の刊行を予定しておりますので、よろしくお願いします。

さて、本誌の『平成15年度京都府埋蔵文化財の調査』にありますように、以前、当センターが調査を行った、弥栄町奈具岡遺跡出土の玉作り関係資料が、国の重要文化財に答申されました。また、綾部市私市円山古墳の出土品と大山崎町土辺古墳出土の家形埴輪が京都府の指定文化財になりました。

埋蔵文化財については、調査・研究のみならず、保護・活用して行くことが、今後ますます重要な責務になってくるものと思われます。

（編集担当＝辻本和美）

京都府埋蔵文化財情報 第92号

平成16年６月28日

発行　(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の３
Tel (075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星商事印刷株式会社

〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961 (代)